新潟県埋蔵文化財調査報告書　第112集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅲ

道 端 遺 跡 Ⅰ

２００２

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅲ

道端（みちばた）遺跡 Ⅰ

２００２

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市新潟空港インターチェンジを起点とし、秋田県鹿角郡小坂町小坂ジャンクションを経て、青森市に至る総延長約440kmの高速自動車道です。日本経済は深刻な不況の中にありますが、この高速自動車道が日本海側の物流を促し、経済の活性化に大きな役割を果たすものと期待されております。

本書はこの道路建設に先立ち発掘調査した「道端遺跡」の報告書です。調査の結果、古墳時代前期と後期の遺物を中心として、他に縄文時代、弥生時代、平安時代、室町時代の遺物も出土しました。これらのことから、遺跡の主たる時期は古墳時代であり、前期と後期に集落が形成されたものと考えられます。また、本調査と並行して行われた一次調査の結果とも合わせて、その集落の中心となる範囲は時期ごとに分かれていることが確認されました。

近年まで、阿賀野川以北の地域では、古墳時代の調査例がほとんどありませんでした。よって、今回の調査から当地域の歴史像を把握する上で、貴重な資料が得られたものと思います。

今回の調査結果が、古墳時代をはじめとする考古学研究に資するとともに、地域における歴史を解明する研究資料として活用されることを願っております。

最後に、この調査に参加された地元住民の方々並びに荒川町教育委員会には多大なるご協力とご援助を頂きました。また、日本道路公団北陸支社村上工事事務所には本調査に際して格別のご配慮を頂きました。ここに厚く御礼を申し上げます。

平成14年3月

新潟県教育委員会

教 育 長　板屋越　麟　一

例　　言

1　本報告書は、新潟県岩船郡荒川町南新保字道端97番地ほかに所在する道端遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）が日本道路公団から受託して実施した。

2　発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）に調査を依頼し、平成13年６月から10月に実施した。発掘調査面積は、延べ面積8,000㎡（4,000㎡×２層）である。

3　航空写真の撮影は、㈱イビソクに委託した。

4　自然科学分析（種実遺体同定・樹種同定・放射性炭素年代測定）は㈱パリノ・サーヴェイに委託した。

5　整理及び報告書作成の作業は、平成13年11月から平成14年３月にかけて埋文事業団が行った。

6　出土遺物及び記録類は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の註記記号は、遺跡名の前に調査年度を付し、「01ミチ」とした。また出土地点及び層位を併記した。

7　引用文献は著者および発行年（西暦）を文中に［　　］で示し、巻末に掲載した。「第VI章　自然科学分析」のみ引用文献を章末に掲載した。

8　既成の地図・図版を用いた場合は、その出典を記した。

9　本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文、遺物観察表、図面図版、写真図版の番号は一致している。

10　本書で示す方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」とは、日本平面国家座標のＸ軸方向を示す。

11　本書に関わる作業は、寺崎裕助（埋文事業団　調査課公団担当　課長代理）の指導のもとに、石川智紀（同調査第二班長）が全体を担当した。遺物実測・トレース・図版作成・写真撮影などの作業を、職員３名、嘱託員１名の体制で行った。

12　本書は石川智紀、内藤真一（同　主任調査員）、鈴木秀人（同　主任調査員）が分担執筆したもので、執筆分担は以下の通りである。編集は石川が行った。

第Ⅰ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章２Ａ～Ｃ、第Ⅵ章……石川

第Ⅱ章１……内藤

第Ⅱ章２、第Ⅳ章１、第Ⅳ章２Ｄ……鈴木

第Ⅳ章２Ｅ・Ｆ……内藤・石川

第Ⅴ章……㈱パリノ・サーヴェイ

13　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くのご教示・ご協力を頂いた。ここに記し厚く御礼申し上げる。（五十音順、敬称略）

荒川町教育委員会　　高浜　信行　　田辺　早苗　　水沢　幸一　　吉井　雅勇

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査・整理作業 …… 2

A　一次調査 …… 2

B　二次調査 …… 4

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡周辺の地理的環境 …… 1

2　歴史的環境 …… 8

A　縄文時代 …… 8

B　弥生時代 …… 8

C　古墳時代 …… 8

D　古　　代 …… 10

E　中　　世 …… 10

第Ⅲ章　調査の概要

1　グリッドの設定 …… 11

2　基本層序 …… 11

第Ⅳ章　遺構・遺物

1　遺　　構 …… 14

2　遺　　物 …… 14

A　概　　要 …… 14

B　古墳時代の遺物 …… 14

C　縄文・弥生時代の遺物 …… 16

D　近世の陶磁器 …… 16

E　古代・中世の土器・陶磁器 …… 17

F　石製品・木製品・金属製品・土製品 …… 17

第Ⅴ章　自然科学分析

1　はじめに …… 18

2　試　　料 …… 18

3　方　　法 …… 18

4　結　　果 …… 19

5　考　　察 …… 20

第VI章　まとめ

《要　　約》……24
《引用文献》……24
《別　　表》……25

挿図目次

第１図　日本海沿岸東北自動車道の路線と遺跡の位置……１
第２図　一次調査トレンチ位置図……３
第３図　遺跡周辺の地形……６
第４図　遺跡周辺の地形分類図……７
第５図　遺跡の位置と周辺の遺跡……９
第６図　奥山荘・荒川保境界復元図……10
第７図　グリッド設定図……12
第８図　土層断面図……13
第９図　木材・種実遺体……22

表 目 次

第１表　平成13年度調査経過……４
第２表　周辺の遺跡一覧……８
第３表　放射性炭素年代測定および樹種同定結果……19

図版目次

図面図版

図版１　調査区上層全体図
図版２　上層遺構個別図・調査区下層全体図
図版３　古墳時代土器
図版４　古墳・縄文・弥生時代土器
図版５　近世・古代・中世の土器・陶磁器
図版６　石器・その他

写真図版

図版７　遺跡周辺の航空写真、道端遺跡近景
図版８　道端遺跡近景、道端遺跡航空写真、Ａ区上層完掘状況、Ｂ区上層完掘状況、Ａ区下層完掘状況、Ⅱ層埋没株検出状況、Ｐ１断面、Ｐ３断面、Ｐ５完掘状況、上層（18Ｌ24区）出土状況
図版９　上層（17Ｍ１区）出土状況、上層（17Ｍ３区）出土状況、下層（19Ｑ１・６区）出土状況、19ライン土層断面、18Ｌ20区土層断面、17Ｎ25区土層断面、16Ｑ25区土層断面、確認114Tr 埋没河川断面、確認８Tr 溝状遺構検出状況、確認10Tr 柱根出土状況
図版10　遺物写真（１）
図版11　遺物写真（２）
図版12　遺物写真（３）

第Ⅰ章　序　　説

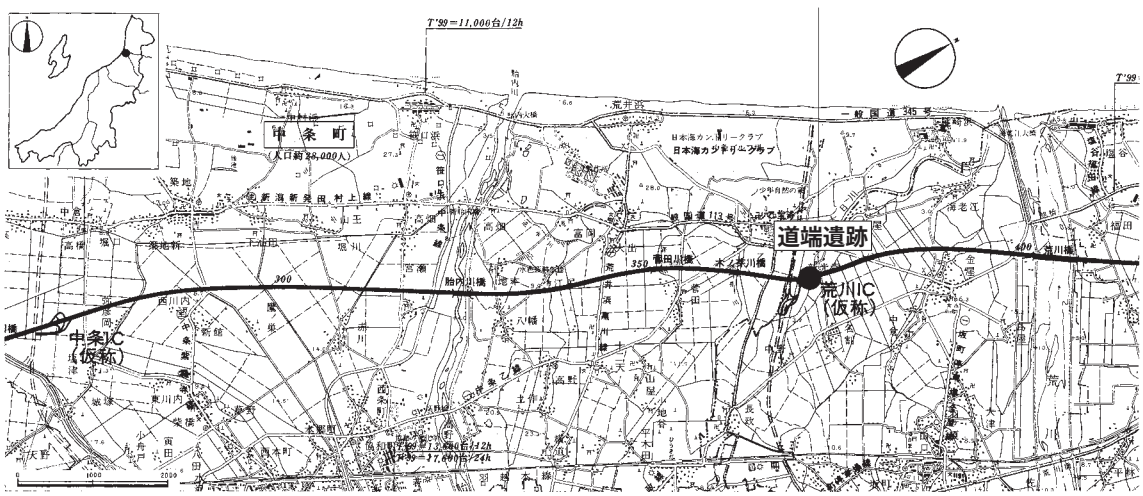
1　調査に至る経緯

日本海沿岸東北自動車道（以下、日沿道）は、新潟市を起点に青森市まで至る、総延長約440kmの高速自動車道である。この路線は、北陸道・関越道・磐越道・山形道・秋田道・東北道と接続し、東日本地域の内陸部や太平洋沿岸部との縦横の道路網を形成する。そのことにより、東北地域との一体的発展と活性化に大きく貢献するなど、環日本海国土軸の根幹をなす重要路線として期待されている。

日沿道の新潟～朝日間における基本計画は、平成元年２月に新潟～村上間が、平成３年12月に村上～朝日間が決定した。また、平成８年12月に中条～神林（朝日を含む）間の整備計画が示された。道端遺跡のかかる荒川インターチェンジは、第13次施工命令区間（中条～朝日間、延長約30.0km）内にあり、平成10年４月に中条～荒川間、平成10年12月に荒川～朝日間の施工命令が出された。これを受けて、日本道路公団北陸支社（以下、道路公団）と新潟県教育委員会（以下、県教委）との間で、法線内の遺跡の分布調査・試掘調査等に関する協議が本格化した。

道路公団は県教委に対して第13次施工命令区間の分布調査を委託し、県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に再委託した。埋文事業団は中条～荒川間（STA.274＋50～STA.399＋20）の踏査を、平成11年10月26日から11月５日までの延べ７日間実施した。その結果、踏査時に周知化された福田遺跡・道端遺跡の２か所と、遺跡推定地12か所について一次調査が必要である旨、県教委に報告した。県教委はその結果を道路公団に通知し、一次調査・二次調査についての協議が行われた。

県教委から調査を受託した埋文事業団は、調査の必要性を報告した計14か所の内の５か所（福田遺跡・道端遺跡・推定地６・推定地８・推定地９）について、平成12年度に一次調査を実施した。その結果、道端遺跡は古墳時代後期と縄文時代後期の２枚の包含層が存在する良好な遺跡であり、二次調査が必要である旨を県教委に報告した。その後、平成13年５月７日の三者協議（道路公団、県教委、埋文事業団）で、道端遺跡の二次調査を平成13年度に実施することに決定した。



第１図　日本海沿岸東北自動車道の路線と遺跡の位置〔原図 日本道路公団作成 10万分の１〕

2　調査と整理作業

A　一　次　調　査（第２図）

道端遺跡は日沿道関係の踏査により、平成11年10月に周知化された。荒川インターチェンジ内に存在し、一次調査対象面積は54,940㎡と広範囲である。調査は平成12・13年度の２か年かけて実施し、平成13年11月段階で全体の８割を終了した。調査方法は、対象地域全体に任意にトレンチ（試掘溝）を設定し、重機・人力による掘削・精査を行う。そして遺構・遺物の有無を確認（トレンチ黒塗りが有、白抜きが無）して、土層堆積状況などを記録した。平成12年10月23日から11月10日に１～44Ｔ（Ｔはトレンチの略）、平成13年３月29日に45・46Ｔ、８月29・30日に47～54Ｔ、９月25日から11月６日に55～135Ｔの調査を行った。

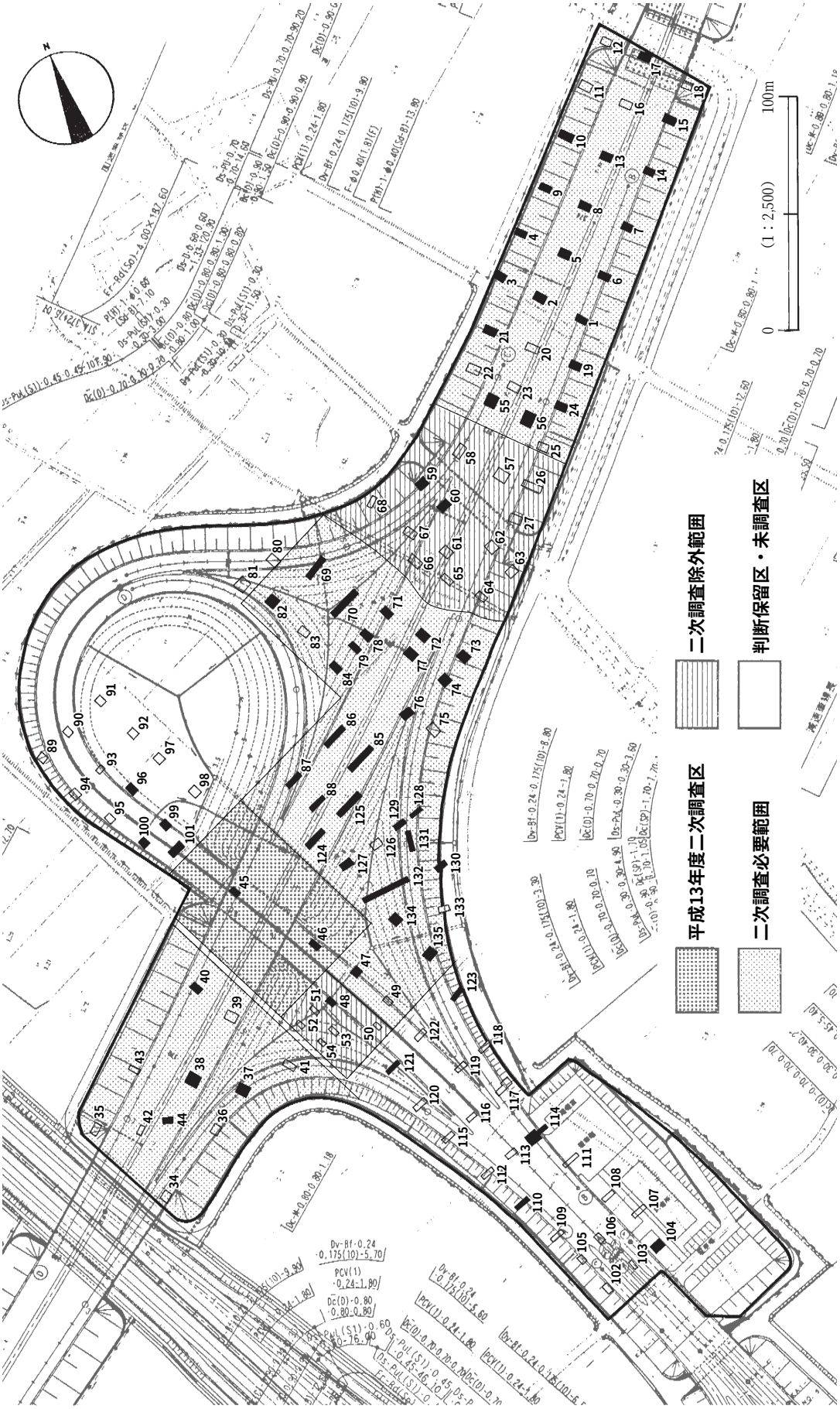
調査の結果、古墳時代の土師器が多量に出土し、当該期の良好な集落遺跡であることが確認された。時期的には前期（４世紀代）と後期（５世紀末～６世紀前葉）があり、集落の中心部分は時期ごとに異なると推定される。大きく３地点に分かれ、前期の集落はSTA.371＋80を中心とする地点、後期の集落はSTA.370＋00とSTA.374＋00を中心とする２地点と考えられる。遺物包含層に対応する灰白色粘質土（第Ⅲ章参照）は、後世の撹乱を受けている範囲も多いが、東側（料金所方面）を除いたほぼ全域に認められている。

古墳時代の遺物包含層の30～50cm下からは、縄文時代後期の遺物が出土している。遺物包含層は、STA.370＋00～ STA.370＋80付近とSTA.373＋40付近を除き、明瞭に判別できない。しかし、当該期の遺物は広範囲にわたり出土する。全体として遺物量は希薄だが、今後遺跡の中心にあたる部分が検出される可能性を残す。また、耕作土中からは中世陶磁器（珠洲焼・青磁など）、中世土師器、近世陶磁器、漆器、時期不明の石製品（砥石など）や木製品などが混在して出土する。

古墳時代の遺構は、８Ｔで畝状の溝を数条、10Ｔでピット２基、15Ｔで土坑１基、38Ｔで土坑１基、76Ｔでピット１基、79Ｔで土坑１基とピット１基を、それぞれ検出した。縄文時代の遺構は検出できていない。また、遺跡の東側からほぼ調査範囲に沿って流れる埋没河川を検出した。その覆土中には、古墳時代の遺物が多量に混じっている部分が確認されている。埋没河川の堆積状況から、この河川は縄文時代以前から存在していたと考えられる。縄文時代～古墳時代の間の時期に対応する覆土から、トチ・クルミ等の堅果や種子類が多量に出土している。

道端遺跡は平成13年度までに、49,340㎡について一次調査を実施した。その結果、第２図で示した範囲の29,400㎡（平成13年度二次調査範囲は含まない）に対して、今後二次調査の必要があると判断した。また、遺構確認面は古墳時代と縄文時代の２枚存在することから、二次調査が必要な延べ面積は58,800㎡（29,400㎡×２）となる。

現段階（平成13年12月段階）では、料金所方面にあたる102Ｔ～123Ｔの範囲の、遺構・遺物は希薄である。しかし、隣接する部分に未買収地があるため、今後その範囲に対して実施する一次調査の結果により、二次調査の有無を判断したい。また西側のループ部分についても大半が未買収地であることから、同様に一次調査結果を見て、80・81Ｔ部分と89～101Ｔ部分の取り扱いを判断することとした。



第２図　一次調査トレンチ位置図

B　二　次　調　査

1）調査の方法と経過

道端遺跡は平成12年度の一次調査の結果、古墳時代後期と縄文時代後期を主体とする遺跡であることが確認された。また、それぞれの時期に対応する遺物包含層が、間層を挟み上下２枚に存在することが確認されていた（以下、古墳時代遺物包含層を上層、縄文時代遺物包含層を下層とする）。

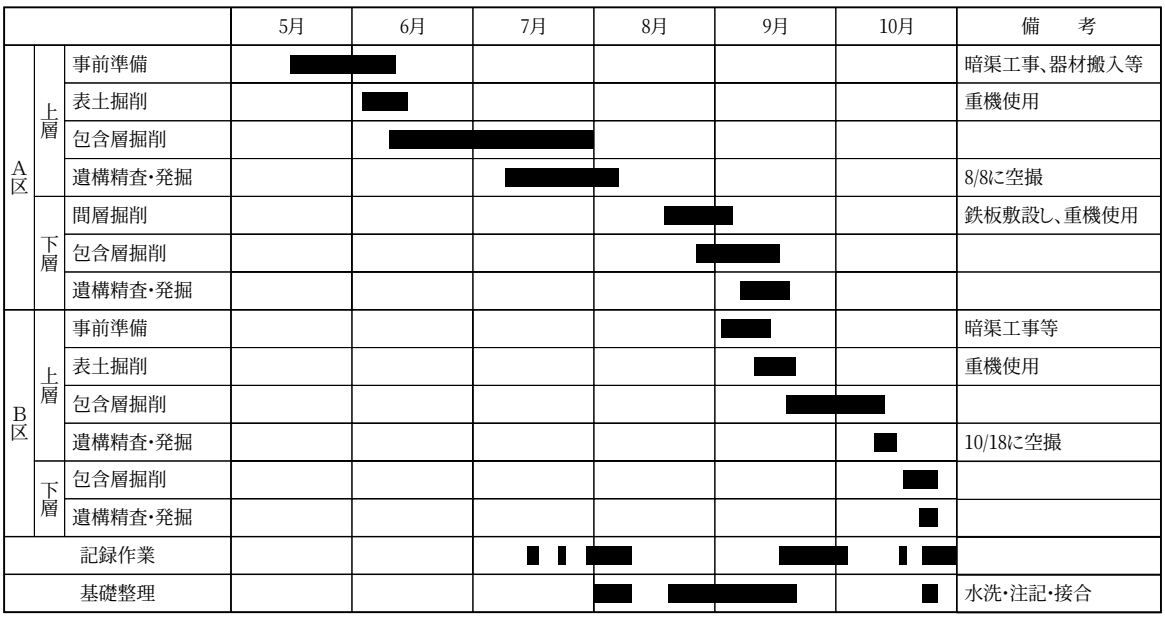
平成13年度は当初5,000㎡（2,500㎡×２層）を調査対象面積として、作業員40名体制で二次調査を開始した。しかし上層の調査が進行するに従い、この範囲は当初の予想より遺構・遺物ともに希薄であることが判明した。そこで８月23日に三者協議（道路公団・県教委・埋文事業団）を行った。その結果、調査区を南東方向に拡張し、3,000㎡（1,500㎡×２層）を追加調査することに決定した。よって平成13年度の全体調査面積は、最終的に8,000㎡（4,000㎡×２層）となった（以下、平面積2,500㎡の範囲をＡ区、平面積1,500㎡の範囲をＢ区とする）。調査期間（準備・撤収期間は除く）は、平成13年６月４日から10月31日までである。調査中の作業経過については第１表に示した。

なお、この調査範囲については、まだ工事発注されておらず、開口状態での引渡しは安全管理に不安があった。そこで、この取り扱いについて公団と協議を11月７日に行い、排土を埋め戻すことに決定した。

排水方法　道端遺跡は水田が耕作される低湿地に立地し、地下には被圧地下水の自噴帯が存在している（第Ⅱ章１参照）。そのため、調査区内の湧水と降雨の溜水を処理する排水施設は不可欠であった。そこで調査前に調査区の周囲をめぐる暗渠を敷設し、集水桝（径50cmの多孔塩化ビニール管）を設け、電動ポンプで常時強制排水を行った。また、調査区内の状況に応じて、適宜、排水溝を人力で掘削した。

表土掘削・間層掘削　表土掘削には0.4㎥のバックホーを使用し、調査員の指示により徐々に掘り下げた。排土は調査区の南東側に、４ｔクローラーを用い運搬した。遺物は小グリッドごとに取り上げた。

間層掘削には同様の重機を使用したが、作業ルートに鉄板を敷設した。これは土質が軟弱であり、下層



第１表　平成13年度調査経過

への影響が考慮されたためである。

層序確認　土層観察用のセクションベルトをグリッド方向に合わせ、Ａ区は十字（19・Ｏライン）に、Ｂ区はキ字（17・19・Ｒライン）に設定した。層序を決定したのち、ベルトの一部または全部を縮尺１／20で実測した。一部のみ実測する場合には、任意に数か所を選び、幅２ｍずつ実測した。

包含層掘削　上層は包含層と遺構確認面の層の色調が近似しており、平面的に判別することは困難であると予想された。そのためトレンチ調査のように、２ｍ幅間隔の掘削を先行して行った。断面観察により包含層除去が終了したと判断した時点で、底面を結ぶようにトレンチ間の残り部分を掘削した。包含層は粘性が高く、掘削は難航した。出土遺物は小グリッドを四分割し、１ｍ四方単位ごとに取り上げた。

下層は遺構・遺物が希薄なことが予想されたため、面積の30～50％を対象に、幅２ｍのトレンチによる調査を実施した（図版２）。Ａ区はセクションベルト両脇と南北方向に４ｍ間隔で、Ｂ区はセクションベルト脇と大グリッドラインに沿って設定した。掘削すべき層厚が30cm位あるため、ホソを使用し、斜めに薄く剥ぐように掘削した。19Ｑ杭付近で遺物が出土したので、その周囲を一部拡張して掘削を行った。

遺構精査・発掘　包含層掘削が終了したのち、遺構を検出するために精査を行った。色調の変化は認められないが、炭化物が散布または集中している範囲については、幅20cm程のトレンチを設定して、土層の観察・検討を行った。部分的には小グリッド単位で浅く掘り下げた後、再度精査を繰り返した。

検出された遺構は小規模なため、半割して記録作業を行った。遺構断面図・平面図は縮尺１／20を基本に実測した。17Ｍ３区の遺物出土状況は、縮尺１／10で実測した。なお、上層で径15～20cm程の立木が数本検出された。柱根の可能性もあったため、立木の脇を断ち割りして、観察・検討を行った。

記録作業　調査範囲の測量と一部の分布図にサイトシステムを用い、その他の図面は全て人力で作成した。通常の撮影は35mmカメラで行い、必要に応じて６×７カメラを使用した。遺跡全景撮影には、ローリングタワーを設置した。空撮は上層のみを対象とし、Ａ区は８月８日、Ｂ区は10月18日に行った。

基礎整理　水洗・注記後に遺物台帳を作成した。その後に接合作業を行い、現地で８割程を終了させた。

２）調査・整理の体制

調査体制

調査期間　平成13年６月４日～10月31日
調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）
調　　査　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括　須田　益輝（事務局長）
管　　理　長谷川司郎（総務課長）
庶　　務　椎谷　久雄（総務課主任）
調査総括　岡本　郁栄（調査課長）
調査指導　寺崎　裕助（調査課公団担当課長代理）
調査担当　石川　智紀（調査課主任調査員）
調査職員　内藤　真一（調査課主任調査員）
　　鈴木　秀人（調査課主任調査員）

整理体制

整理期間　平成13年11月５日～平成14年３月29日
整理主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）
整　　理　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括　須田　益輝（事務局長）
管　　理　長谷川司郎（総務課長）
庶　　務　椎谷　久雄（総務課主任）
整理総括　岡本　郁栄（調査課長）
整理指導　寺崎　裕助（調査課公団担当課長代理）
整理担当　石川　智紀（調査課主任調査員）
整理職員　内藤　真一（調査課主任調査員）
　　鈴木　秀人（調査課主任調査員）
作　　業　柳谷　栄子（嘱託員）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

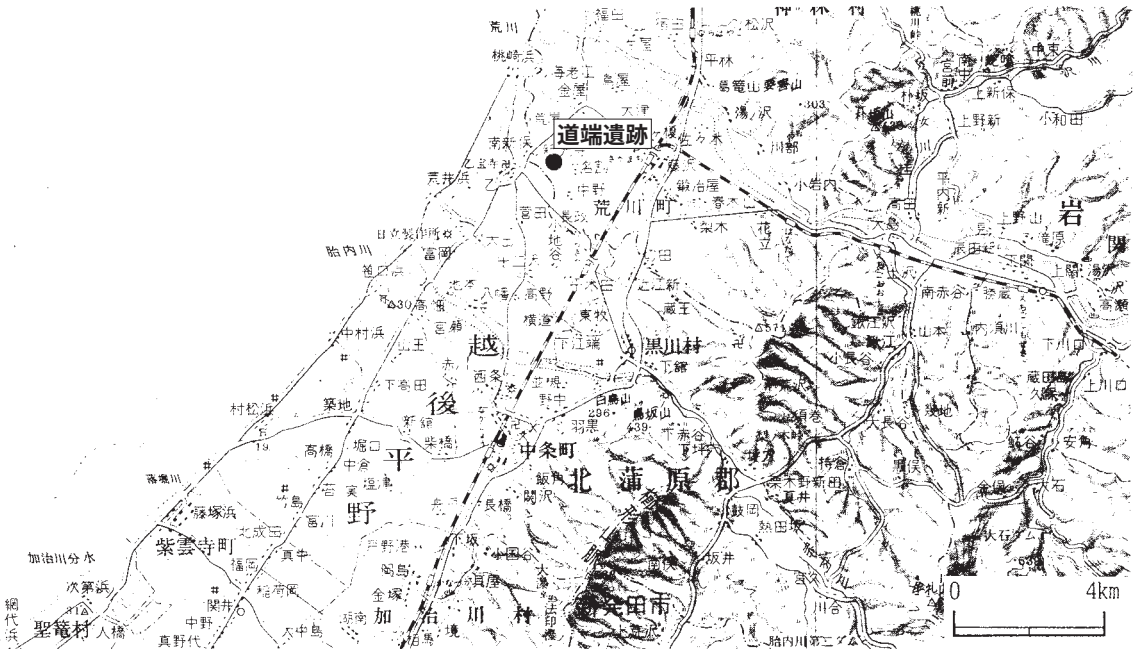
1　遺跡周辺の地理的環境

道端遺跡は岩船郡荒川町大字南新保97番地ほかにある。荒川町は新潟県北部、下越地方に広がる新潟平野の北東部に位置している。町域の北は岩船郡神林村、東は同郡関川村、南は北蒲原郡黒川村及び西から南西が同郡中条町に接している。町のおよそ半分は平野で、その東部に山地、丘陵地がある。夏はフェーン現象による気温の上昇、冬は降雪という日本海側特有の気候を示している。

荒川町は北東に要害山（287m）東に高坪山（570m）南東に櫛形山脈や荒川丘陵等の山地や丘陵地、日本海に面した砂丘地、荒川と胎内川が形成した低地という大きく３つの地形に分けることができる。

山地の中央部は花崗閃緑岩、その周縁部は新第三紀層からなっており、地形傾斜が20～30°の比較的急斜面になっている。丘陵部の分布は櫛形山脈を始めとする山地の西側で広く、東側で狭いという特色が見られる。丘陵部を構成する地質は礫岩、砂岩、泥岩それらの互層及び凝灰岩がそれぞれ東落ちの単斜構造をなしている。それを褐色森林土が被覆して、赤松の植生を見ることができる［永田1972］。

海岸部の砂丘地は新潟砂丘の一部で、乙砂丘とも呼ばれている。新潟砂丘は角田山麓から三面川付近まで約70㎞の長さがあり、中央部の阿賀野川東部では最大で10列の砂丘列が形成されている。このうち、古い砂丘は内陸部に、新しい砂丘は海岸部にそれぞれ並行している。そして、北部に行くほど砂丘列は一つにまとまっていき、古い砂丘の上に新しい砂丘が重なるようにして形成されている。遺跡近辺の砂丘地は幅が約２㎞、標高は胎内川、荒川河口近くでは約２～４mであるが、胎内川右岸の中条町富岡で標高約30mになる場所もある。遺跡に一番近いところの標高は約10m前後である。砂丘地は淘汰の良い細粒、中粒

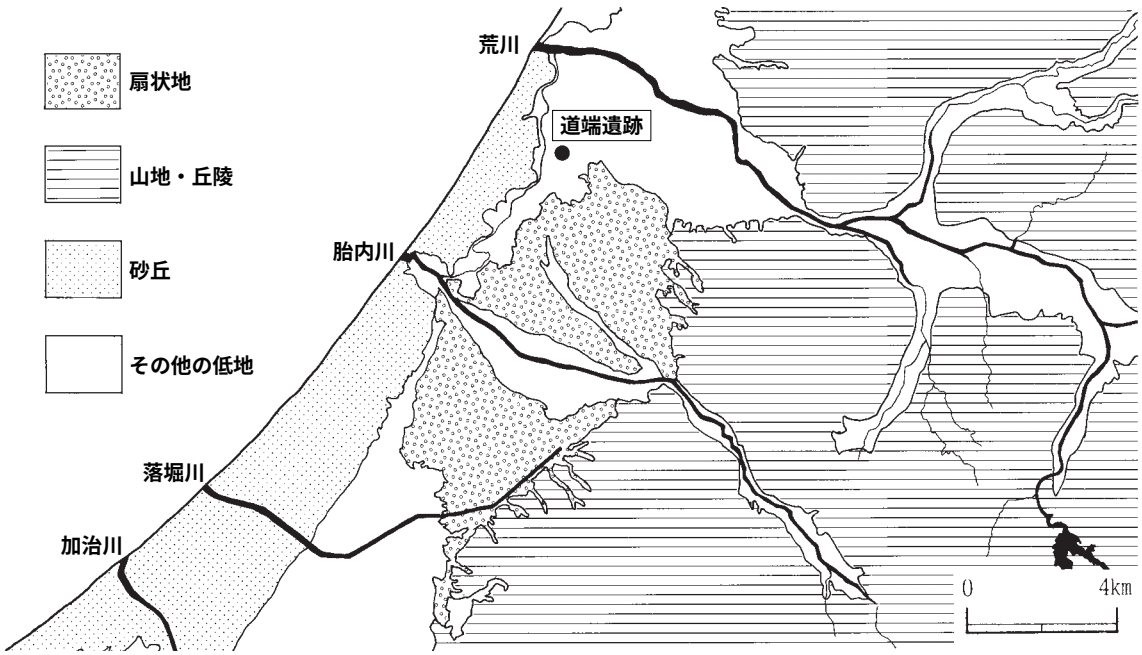


第３図　遺跡周辺の地形　〔国土地理院１：200,000　「村上」1982〕

の砂層からなり、特に古い砂丘には腐植質の黒色砂の層が交じっている。それぞれの砂丘地は、包含する遺物から縄文前期、古墳、室町の各時代までに形成されたものと推定されている［小林ほか2000］。

低地の北部には荒川が西流している。荒川は山形県の大朝日岳（1,870m）から源を発し、中小の河川を合流して新潟県に入り、乙大日川と合流し中条町桃崎浜で日本海に流れ込んでいる。胎内川は飯豊山脈の二つ峰（1,642m）に源を発し頼母木川、鹿ノ俣川等を合わせて中条町笹口浜で日本海に流れ込んでいる。この川は1888（明治21）年に日本海に向けて開削された。それまで、胎内川の流路は、海へ注ぐことができないため乙砂丘に平行して北流し、中条町桃崎浜で荒川と合流していた。この際、流路の移動、氾濫等による影響で、遺跡のある場所を含めた流域各地には湖沼や湿地が形成された。また、この二つの河川は共に、谷の出口から海へ注ぐ、扇状地性の地形を形成し、この地域の地質・地形に影響を与えた。荒川の形成した低地は扇頂高度、勾配が緩やかである。これは上・中流域の小国盆地、関川盆地の流域で砂礫を堆積させているため、下流域で扇状地形が十分に発達しなかったことによる。また、現在まで河川の浸食を受けているため、地形的には谷底平野に分類されている。一方、胎内川が形成した低地は、扇頂高度、勾配が急である。これは、上流域での遷急点が少なく、流域にある黒川盆地も小さいことなどから、砂礫が下流域で堆積され、扇状地が発達したことによる［寄藤・大矢1988］。（第４図は『土地分類基本調査「中条」』の地形図と『新潟県地質図説明書』の表層地質図をもとに作成した。）

道端遺跡はその扇状地の扇端部付近に位置する。標高は約3.1mを測る。ここは、旧河道や湖沼跡の粘性土を主体とした堆積物の分布地帯であり、いわゆる後背湿地である。地下水は飽和され、地表面が低湿な状態になっている。この地域の地層は細砂、埋木、シルト、および泥炭等で構成され、厚さ10m以上にわたって堆積している所もある。遺跡を含めたこの付近では、伏流水も被圧地下水に転化し、幅広い自噴帯を形成している［石橋ほか1977］。このため、遺跡とその近辺の地盤は軟弱な部分が多い。



第４図　遺跡周辺の地形分類図（１：200,000）

2　歴 史 的 環 境

道端遺跡の発掘調査の結果、古墳時代前期と後期を主体とした遺跡であることが分かった。その他、縄文時代・弥生時代・古代・中世の遺物が若干出土した。なお歴史的環境については縄文時代から中世初頭までを概観する。

A　縄　文　時　代

荒川町の縄文時代の遺跡は、道端遺跡を含めて現在までに18遺跡が確認されている。平野部には古町遺跡、名割古谷地遺跡、道端遺跡の３遺跡が確認されているだけであり、遺跡の多くは荒川左岸の丘陵の舌状台地や緩斜面に存在している。中でも荒島前山Ａ～Ｃ遺跡、発堀遺跡の一帯は縄文土器の宝庫と言われている。しかし、国道113号線によって北側の遺跡は消滅している［吉井1993］。全体的に小規模な遺跡が多く、そのほとんどは縄文中期（5000～4000年前）の遺跡である。

B　弥　生　時　代

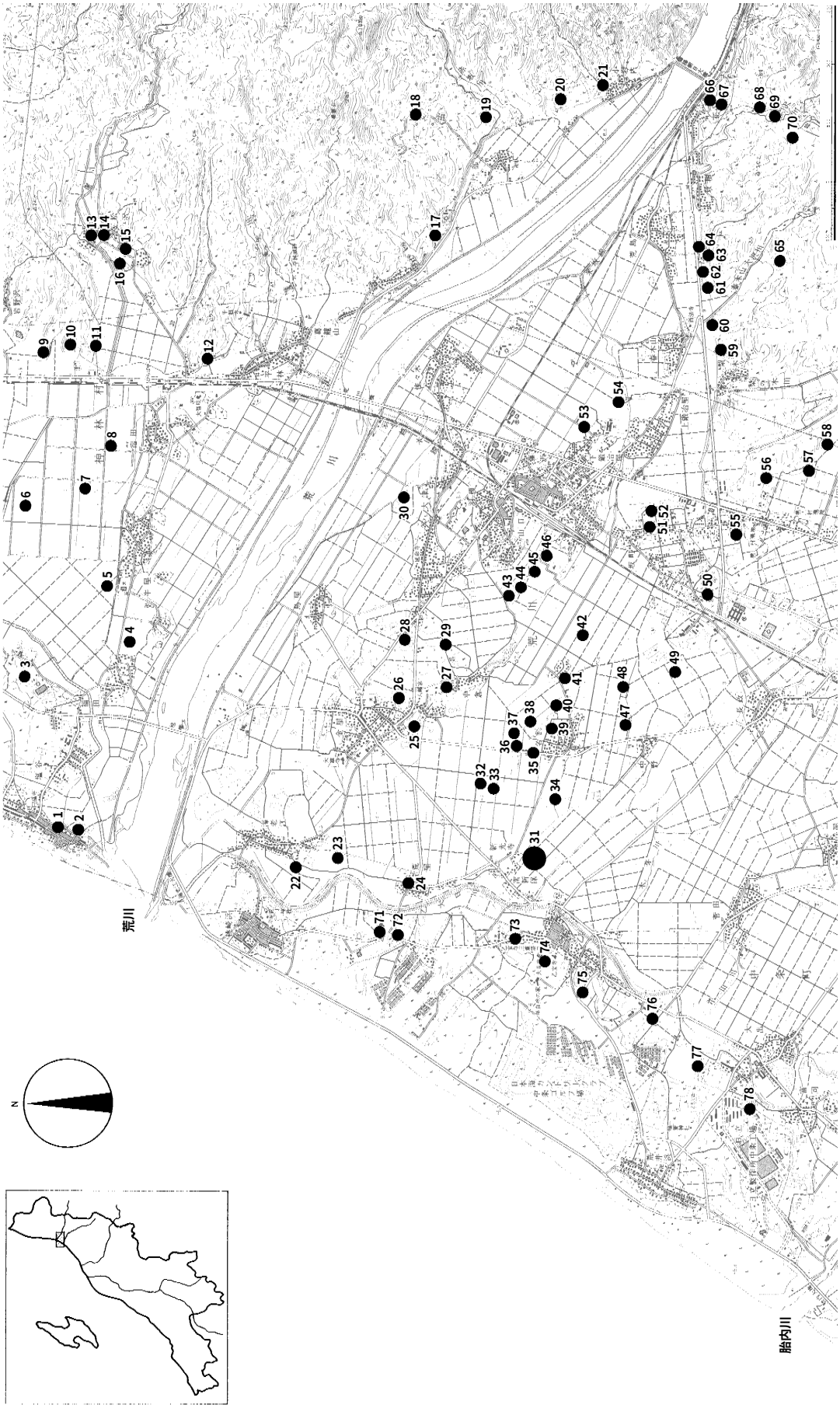
この時代の遺跡は荒川町ではこれまで確認されていなかった。しかし、町の対岸の神林村には大池遺跡群・長松遺跡群・衣田遺跡がある。長松遺跡群からは中期の天王山式・宇津ノ台式土器が出土しており［田辺1991］、衣田遺跡からは後期の高杯の杯部と甕が出土している［田辺ほか2001］。また、隣の中条町の乙遺跡でも、中期の土器や蛤刃型磨製石斧・管玉未成品が出土している。道端遺跡の一次調査においても弥生時代の土器片が出土したことから、荒川町でも弥生時代の遺跡の存在が確実となった。

C　古　墳　時　代

道端遺跡の周辺（第５図）には荒川左岸（荒川町）に古谷地Ｂ遺跡が１遺跡、右岸（神林村）には長松遺跡群と衣田遺跡の２遺跡が確認されている。長松遺跡群は砂丘列上に位置しているが、それ以外は平野部の微高地に立地している。古谷地Ｂ遺跡は県営ほ場整備事業に伴い荒川町教育委員会によって1992年に発掘

№	遺跡名	時代区分	№	遺跡名	時代区分	№	遺跡名	時代区分	№	遺跡名	時代区分
神　林　村			21	小岩内	縄文	41	野　口	古代	62	荒島前山B	縄文
1	渡古屋敷	古代	荒　川　町			42	田　屋	古代	63	荒島前山A	縄文
2	古屋敷	古代	22	屋敷添	古代	43	坂町宮ノ腰D	古代	64	発　堀	縄文
3	長　松	縄文/弥生/古代	23	古　町	縄文	44	坂町宮ノ腰C	古代	65	山　田	縄文
4	西　部	古代	24	行　塚	古代	45	坂町宮ノ腰B	古代	66	山ノ下	縄文
5	中　部	古代	25	赤　井	古代	46	坂町宮ノ腰A	古代	67	花　立	縄文
6	衣　田	縄文/古墳/古代	26	宮　分	古代	47	高柳B	古代	68	花立前山	縄文
7	道　上	古代	27	舘ノ腰	古代	48	高柳A	古代	69	大山B	縄文
8	家ノ後	古代	28	石橋A	古代	49	下　野	古代	70	大山C	縄文
9	黒田B	縄文/古代	29	中倉諏訪ノ木	古代	50	宮　林	古代	中　条　町		
10	黒田A	縄文/古代	30	田　島	古代	51	大道端B	古代	71	上相子	古代
11	持　体	古代	31	道　端	縄文/弥生/古墳	52	大道端A	古代	72	地蔵堂	古代
12	向　山	古代	32	鴨　侍	古代	53	向屋敷	古代	73	乙	弥生
13	松沢屋敷添	古代	33	寺　田	古代	54	諏訪ノ木	古代	74	乙宝寺	古代
14	鯉　池	古代	34	前谷地	古代	55	北　田	古代	75	城　山	古代
15	寺　田	古代	35	古谷地A	古代	56	元山窯跡群	縄文/古代	76	ニツ山	古代
16	下谷地	縄文/古代	36	古谷地B	古墳/古代	57	笹　谷	古代	77	中　島	古代
17	湯ノ沢	縄文	37	金屋小谷地	古代	58	笹谷南	古代	78	富　岡	縄文/古代
18	川部長峰	縄文	38	名割古谷地	縄文/古代	59	谷　内	縄文			
19	川　部	縄文	39	名割宮ノ腰	古代	60	春木山城	縄文			
20	下　山	縄文	40	名　割	古代	61	荒島前山C	縄文			

第２表　周辺の遺跡一覧



〔原図　国土地理院「坂町」1/25,000を縮小〕

第5図　遺跡の位置と周辺の遺跡

調査が行われ、溝２条と土坑１基を検出した。土坑から前期の北陸系の甕、二重口縁壷、高杯、小型器台、有孔鉢などが出土している［吉井1993］。道端遺跡は古谷地Ｂ遺跡から西に１km程のところに近接している。

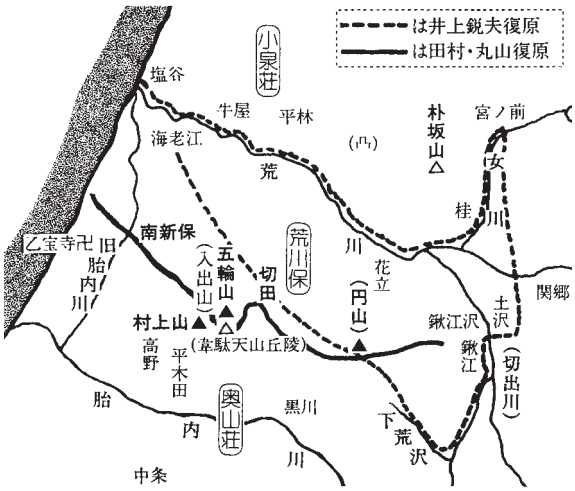
Ｄ　古　　代

大和朝廷は阿賀野川以北の進出拠点として、648（大化４）年に磐舟柵を設置した。柵の所在地については、村上市と神林村に接する旧岩船潟周辺説や諸上寺とする説、地名が「柵戸（きのと）」に通じ、古代の塔心礎が残る中条町乙（乙宝寺）付近とする説があった。また村上市の浦田山丘陵にある石組遺構（石廓堡）も、平成元年と６年の新潟大学考古学研究室の調査で、古墳時代後期の横穴式石室と判明した［甘粕ほか1991］。従って磐舟柵に比定される遺跡はまだ発見されてない。

さてこの時期の荒川町の遺跡は、現在までに34遺跡が確認されている。第５図の範囲では中条町の乙宝寺を中心とした乙大日川付近で７遺跡が、荒川右岸（神林村）では12遺跡が確認されている。現在まで荒川町域では、７世紀代及び10世紀後半～12世紀代の遺跡は確認されていない。

Ｅ　中　　世

私有地である寄進地系荘園に対し、国有地（国衙領＝公領）として「保」があった。保の形成時期は、院政期（11世紀半ば以降）とされるが、荒川保も含めた越後の保の形成は、平安末期の12世紀前半以降ではないかと推定できる。阿賀北地方一帯は荒川保を除き、小泉荘・奥山荘・加治荘などの広大な荘園が全域を占めていた。越後の保は河川流域に成立したものが多く、荒川保も荒川流域に成立している。その範囲は現在の荒川町のほぼ全域と、関川村の女川・鍬江沢川流域にあたると考えられる。田村裕氏は次のように述べている「11世紀半ばに荒川の南の沼垂郡北部に奥山荘が成立し、11世紀後半に荒川の北の岩船郡に小泉荘が成立した。このように荒川を挟む南北に広大な領域型荘園が成立した事を契機に、国衙側は荒川やその支流である女川・藤沢川・鍬江沢川の進止権を根拠にこれらの川を生活の拠点とする人々を国衙支配下の在家として掌握し、次に在家の人々が副次的に生産活動の対象とした田畠や山野をも保の領域に組み込んで、荒川保を建立していった」［田村1987］。



第６図　奥山荘・荒川保境界復元図
〔阿部（1987）より転載〕

在地の開発が進むと荘園の境界が問題となり、しばしば幕府にもちこまれ「相論（裁判）」の形をとって争われた。このような文書に1255（建長７）年の「関東下知状案（米沢市立図書館所蔵色部氏文書）」や1292（正応５）年の「奥山荘・荒川保境相論和与絵図」がある。前者は牛屋条（神林村）との境を、後者は奥山荘との境を取り決めたものである。しかし、現在のところ奥山荘との境界には諸説があり、確定には至っていない（第６図）［阿部1987］。

第Ⅲ章　調 査 の 概 要

1　グリッドの設定（第７図）

道端遺跡は荒川インターチェンジ内に存在している。しかし、平成13年度の二次調査前の段階では、大部分が一次調査未了区であったため、遺跡全体の範囲を把握できていなかった。そこで今後のことを考慮し、全域をカバーできるようにグリッドを設定した。方向は日沿道のセンター杭を基準とし、方位と合わせなかった。グリッドの主軸はSTA.370＋00杭（Ｘ＝235159.995、Ｙ＝80309.888）とSTA.374＋00杭（Ｘ＝235519.131、Ｙ＝80485.549）を結んだラインとした。主軸は南北方向に向き、方位は真北から約26度東偏している。主軸と直交する東西方向の軸は、STA.370＋00杭を基準の交点として設定した。

グリッドは大・小の２種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを２m四方に25等分したものである。大グリッドの名称は、南西隅の杭を基点として南北方向を算用数字、東西方向をアルファベットとし、両者の組合せにより表示した。なお、基準交点となるSTA.370＋00杭の北東側の区画を「11Ｐ」とし、各グリッドの名称を付けた。小グリッドは１～25の算用数字で表し、南西隅を１、北東隅を25とし、「21Ｐ13」のように大グリッド表示の後につけて呼称した。また必要に応じて、小グリッドを１m四方に細分した。ア～エのカタカナで表し、南西隅をア、北東隅をエとして呼称した。

平成13年度調査区では、21Ｐ杭の座標値が「Ｘ＝235249.825、Ｙ＝80353.826」を示す。

2　基　本　層　序（第８図）

インターチェンジはグリッド軸に対して、南北方向に440m、東西方向に330mと広範囲であり、土層の堆積状況は一律ではない。よって基本層序は、平成13年度の二次調査区で観察された土層を記述する。しかし、広範囲に実施した一次調査の結果から見ても、今後も変更は少ないと思われる。またインターチェンジのほぼ全域にわたり、腐食土層が何枚か確認されている。今後調査が進行するに従い、腐食土層を鍵層として、遺跡の立地する微地形や周辺環境が明らかになってくるものと思われる。

Ⅰ層　耕作土を全てⅠ層とした。現水田耕作土と旧耕作土があり、厚く堆積する部分では数層に分層が可能である。平安・室町・江戸時代の遺物が混在して出土する。

Ⅱ層　腐植土層である。標高的に高い部分は、耕作の撹乱を受ける。層中に立木や倒木が検出される。

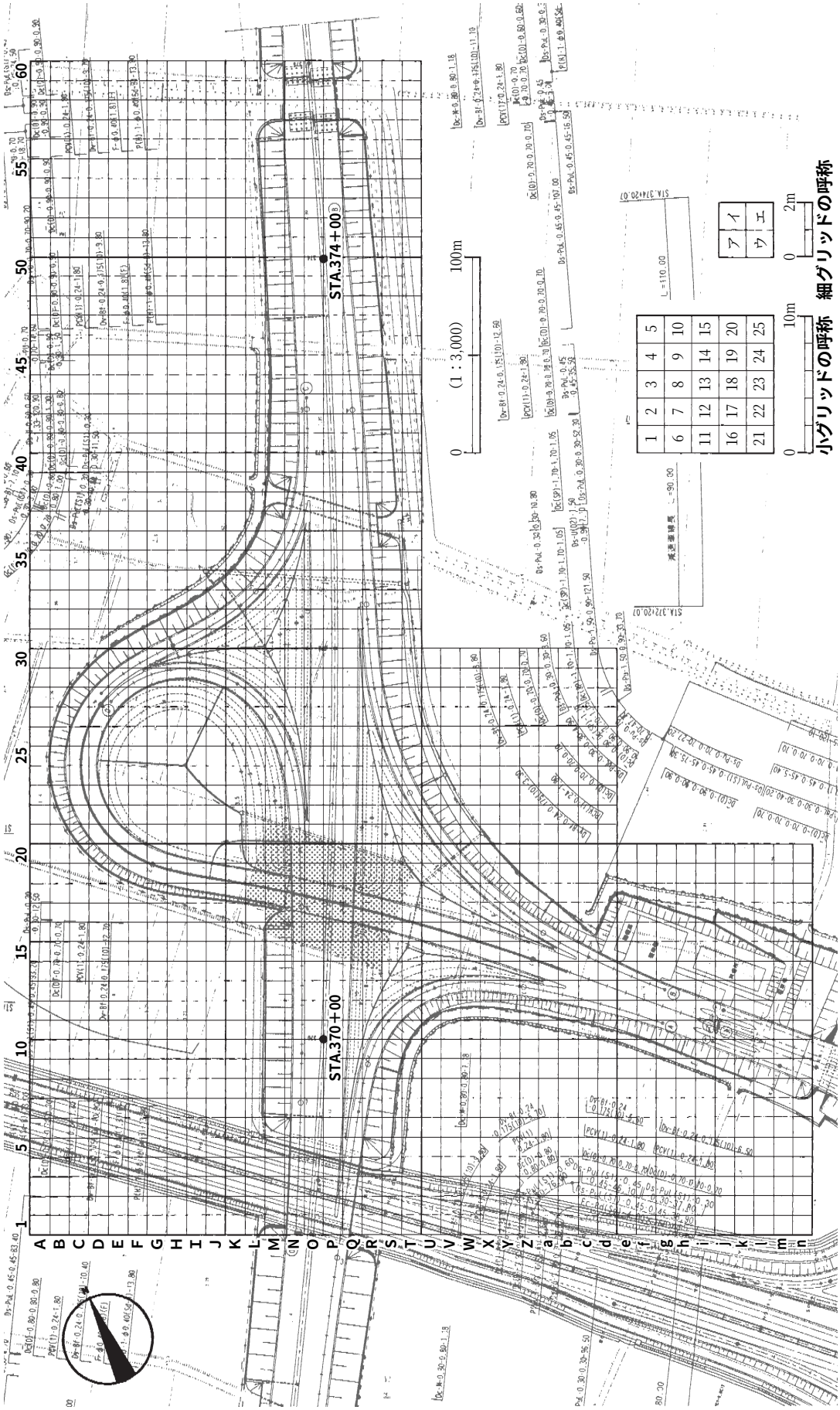
Ⅲ層　灰白色粘質土を主体とする層で、古墳・弥生時代の遺物包含層である。本層の上部はⅡ層の影響のためか、やや褐色を呈する。全体的に遺物は、この上部から多く出土する。

Ⅳ層　青灰白色粘質土を主体とする層で、Ⅲ層と色調は似た部分が多い。植物質を多く含み、しまりが弱い。部分的に炭化物を多く含み、層状を呈する部分もある。

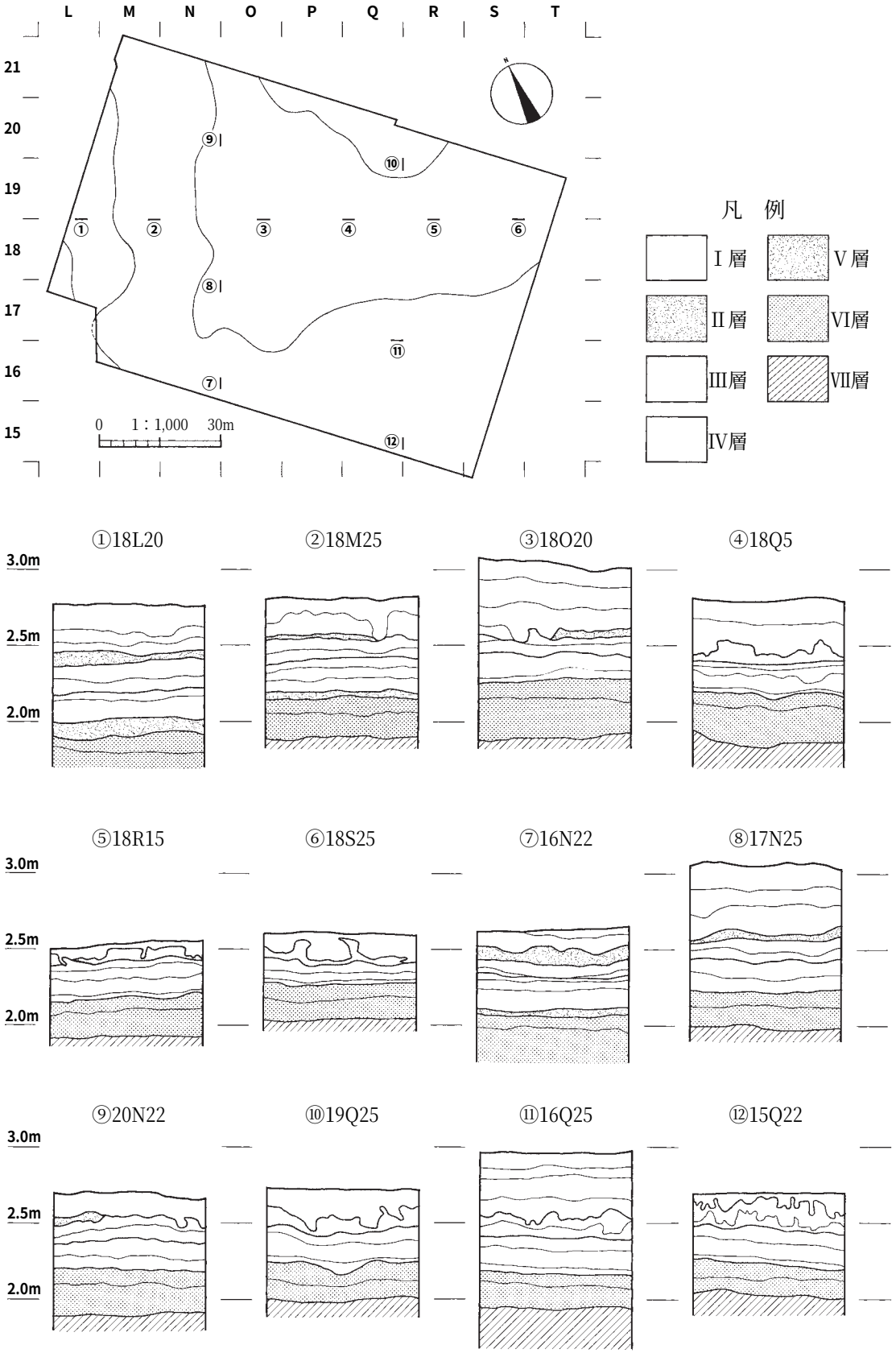
Ⅴ層　腐植土層である。調査区の低地部分（南西方向）で観察される。

Ⅵ層　青灰色シルトを主体とする層で、縄文時代の遺物包含層である。上層（Ⅵa）は色調が明るく、粘性が高い。下層（Ⅵb）は少量だが砂との互層を呈する。遺物はⅥb層中から多く出土する。

Ⅶ層　緑灰色シルトを主体とする層で、砂との互層を呈する。Ⅵ層と色調が近似する。


STA.370＋00
STA.374＋00
(1：3,000)
0
100m
小グリッドの呼称
細グリッドの呼称
10m
2m
ア
イ
ウ
エ

第７図　グリッド設定図


L M N O P Q R S T
21
20
19
18
17
16
15
0 1：1,000 30m
凡 例
Ⅰ層
Ⅱ層
Ⅲ層
Ⅳ層
Ⅴ層
Ⅵ層
Ⅶ層
①18L20
②18M25
③18O20
④18Q5
⑤18R15
⑥18S25
⑦16N22
⑧17N25
⑨20N22
⑩19Q25
⑪16Q25
⑫15Q22
3.0m
2.5m
2.0m

第８図　土層断面図

第Ⅳ章　遺 構 ・ 遺 物

1　遺　　構

平成13年度の上層の遺物出土状況は、Ｂ区で点在的な出土を示す。一方、Ａ区では、個体がまとまって廃棄された集中域と、十数片程度が一定のまとまりをもって出土する、数箇所の散布域が見られる（図版１）。下層では19Ｑ１区を中心に土器片が十数点散布していたが、遺構などは確認できていない（図版２）。

古墳時代の遺物は少量ながら、調査区内では低地に相当する、Ａ区南西方面から出土したものが多い。遺構も遺物が比較的多い、南西方面でピットが３基確認されている。また17Ｍ１区で２個体、17Ｍ３区で１個体の遺物集中域を検出したが、遺構などの掘り込みは認められなかった。

Ｐ１（図版２・８）

18Ｍ９区に位置する古墳時代のピットである。平面形は円形を呈する。規模は直径40cm、深さ16cmを測る。覆土は炭化物を少量含む褐色土で、２層に分層される。

Ｐ３（図版２・８）

18Ｎ25・19Ｎ21区に位置する古墳時代のピットである。平面形はＮ－11°－Ｅを長軸とする不定形な楕円形を呈する。規模は長軸56cm、短軸30cm、深さ14cmを測る。覆土は暗褐色粘質土の単層である。

Ｐ５（図版２・８）

18M15区に位置する古墳時代のピットである。平面形はＮ－78°－Ｗを長軸とする楕円形を呈する。規模は長軸78cm、短軸41cm、深さ８cmを測る。覆土は炭化物を少量含む黄灰色粘質土の単層である。

2　遺　　物

Ａ　概　　要

平成13年度の調査で出土した遺物は、平箱（54×34×10cm内測）で約５箱と少ない。縄文時代から近世の遺物が出土しており、古墳時代の遺物が大半を占める。遺構内から出土した遺物は無く、大半は遺物包含層（Ⅲ層）からの出土である。古墳時代の遺物に次いで多く出土したのが近世の遺物で、大半はⅠ層下半の旧耕作土中から出土している。器形の全体を把握できる資料は少ない。縄文時代の遺物は遺物包含層（Ⅵ層）から十数点出土した。その他の時代の遺物は、弥生時代がⅢ層から、古代・中世の遺物がⅠ層下半から少量づつ出土している。

掲載遺物は平成13年度二次調査出土遺物を中心に選択したが、その他に平成12・13年度一次調査のものを加えた。一次調査出土遺物は、確認トレンチ単位で掲載した。

Ｂ　古墳時代の遺物（図版３・４・10）

二次調査で出土した遺物は、時期的に前期の遺物が大半を占め、後期の遺物が少量存在する。一次調査の出土遺物の時期幅は、前期の遺物が初頭～末まで存在し、後期（中期末を一部含む）はほぼ前葉で収まるよ

うである。器種は須恵器に杯蓋、土師器に甕・壺・高杯・器台・鉢などが認められ、内面黒色土器の杯が数点ある。

古墳時代の遺物は１～29で、１～10は二次調査出土遺物、11～29が一次調査出土遺物である。時期的には１～８・15～29が前期の遺物、９～14が後期の遺物と考えられる。

１～３は「く」の字状口縁の甕である。内外面ともに幅広のハケで調整される。１は17Ｍ１区から、２・３は17Ｍ３区からまとまって出土した。１の口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は凹状の面をもつ。２・３の口縁部は１より直線的で、口縁端部は平坦な面をもつ。口縁部の形状が近似しており、同一個体の可能性も残すが、３の口縁部と体部の境にはハケの始点が明瞭に残る。２は全体的に歪みがあるが、底径2.4cm、器高28.9cm前後と推定できる。１～３はいずれも胴部上半に最大径があり、球胴形を呈する。

４は有段口縁壷と考えられる。外面に粘土を張付けて一段肥厚させ、断面は三角形を呈する。５は東海系の受口口縁を呈する壷である。胎土は他と比較してφ0.5mm以下の砂礫を多く含む。６は体部全体が緩く内湾する鉢である。口縁部はほぼ直立し、端部は内面に面をもつ。７は口径10.3cmの丸底の鉢である。体部が内湾して立ち上がり、口縁部で屈曲して外反する。内外面ともにナデで、丁寧に調整される。８は器台で、脚部は「ハ」字状に大きく開く。外面と受部内面に赤彩が施されている。

９～14は後期に属する遺物である。９は内面が黒色処理された杯で、器高の中位に稜をもつ。内面には丁寧なミガキが見られるが、器面が部分的に弾けている。胎土に海綿骨針を多く含む。10は高杯の脚である。「ハ」字状に開き、端部でわずかに屈曲する。また接地する面は浅い凹状を呈する。上部には内面黒色された杯身がつくものと思われる。11は須恵器の杯蓋で、内外面ロクロナデ、天井部中程からロクロケズリが見られる。頸部がほぼ垂下していることから、推定口径は12.6cm程と思われる。陶邑編年のTK23～47に比定できる。12は小型丸底壷で、胴部最大径は12.2cmを測る。球胴形の体部は全体的に歪みがあり、底面は安定しない。接合痕から粘土紐幅は約1.5cmである。13は「く」の字状口縁の甕で、口縁部は外反しながら先細りになって抜ける。内面の口縁部と体部の境は肥厚して段をなす。14は甕の底部で、底面はケズリにより上げ底となり、外縁が幅１cm弱の高台状を呈する。内外面ハケが明瞭に残る。

15～29は前期の遺物である。15は有段口縁壷で、内外面ともに赤彩が認められる。16は口縁外面に擬凹線をもつ甕である。出土遺物では最も古相を呈する。17は「く」の字状口縁の甕で、口縁部は直線的にのび、端部は内側に面をもつ。焼成は非常に堅緻で、調整が明瞭に観察できる。内外面ハケで、外面はハケ後に幅４mm程の棒状工具によるミガキが施されている。18は受口状を呈する甕と考えられる。口縁端部が上方へつまみ上げられて、外側に幅７mm程の面をもつ。体部の壁厚は比較的薄い。19は大きく外反する口縁部で、有段口縁壷または器台と思われる。内外面に強い横ナデが見られる。20は甕で、口縁部が上方へ直線的にのび、端部で外方へ屈曲する。端部は外側に面をもち、内面はわずかにつまみ上げられている。21は脚部に円形の透かしが三方に入る器台である。調整は内外面ともにミガキ、脚部内面にはハケが残る。22は脚部下半に透かしが三方に入る高杯と考えられる。23は口縁が緩く外反する甕と考えられる。先細りの口縁部は端部で短く屈曲し、上方に狭い面をもつ。外面は荒れて調整不明だが、体部内面に明瞭なハケが認められる。24は推定口径11.2cmの鉢である。体部は大きく開き、内湾して上半でほぼ直立する。口縁部は外方へ屈曲し、内側に面をもつ。底部内面に回転状のナデが見られる。25は小型の器台で、外面に赤彩が施される。急斜度の脚部は、外側に面をもって短く収まる。脚端部は上下方向につまみ出され、稜をなす。26は甕または広口壺と考えられる。口縁部は短く外反するが、ほぼ直立している。端部でわずかに肥厚して丸く収まる。27は底部が緩く湾曲し、体部がほぼ直線的に立ち上がるコップ状の土器である。

口縁端部をわずかに欠損した、ミニチュア土器の一種と考えられる。28は蓋の鈕、いわゆるつまみ部分で、径は2.6cmである。29は甕または壺の底部で、底面はケズリにより上げ底となり、外縁が幅1.3cm程の高台状を呈する。内外面にハケが明瞭に認められる。

Ｃ　縄文・弥生時代の遺物（図版４・６・11）

縄文時代・弥生時代の遺物は少量だが、道端遺跡全域に点在している。今年度調査区内では、19Ｑ１区を中心としたⅥ層中から、縄文土器片が十数点出土した。他に一次調査時に、19Ｔ・21Ｔ・38Ｔ・40Ｔ・104Ｔ・110Ｔの各トレンチから当該期の遺物が出土している（第２図）。

30～34は縄文土器である。時期が比定できるのは33のみで、後期後半～晩期初頭に属する。他の遺物もその前後に収まるものと考えられる。30は波状を呈する深鉢の口縁部片で、LR縄文を地文とし、端部付近に１条の沈線が巡る。31・32はⅥｂ層中から出土し、同一個体の可能性が高い。LR縄文を地文とし、幅１～1.5cm間隔で３、４条の平行沈線が施されている。33は口径26cm前後の粗製深鉢である。裏面に縦方向の刻みを入れた突起を有し、波状に近い平口縁を呈する。文様は未結束のLR縄文で羽状を呈している。34は口径17cm前後の小型深鉢である。焼成は不良で、器面は荒れている。文様は口縁下2.5cmに位置する１条の横位沈線で区切られ、上方は不規則な沈線、下方はRL縄文が施されている。

35・36は弥生土器である。35は大きく外反する甕の口縁部で、内面に３段の綾杉沈線文が施される。弥生中期の小松式に比定される。36は壺の体部片で、２本の平行沈線（下向き連弧文）が施文される。沈線間にはハケ調整が残るが、それ以外は強いミガキで消されている。弥生中期の栗林式に比定できる。

61・62は有茎の石鏃で、61が珪質頁岩製、62が半透明の頁岩製である。両者ともに両面周辺加工調整で、62は素材剥離面を大きく残す。63は珪質頁岩の剥片で、右側縁に微細剥離痕が認められる。64は縦長剥片を素材とした横型の石匙である。つまみ部は中央より右側に片寄る。刃部のみ片面加工調整で、他は両面加工されるが、左側縁に打点面が残される。石材は半透明の頁岩である。

65は流紋岩製の礫器で、長軸長約12cmの扁平楕円形の礫を素材とする。ほぼ同一箇所に数回の剥離痕が観察できる。66は流紋岩製の磨石である。大半を欠損するが全面に磨痕が見られ、上面は平坦を呈する。ほぼ中央に敲き痕と思われる部分があるが、風化のため不明確である。67は軽石製で、面状の摩耗痕が側面に見られる。研磨具の一種と思われ、Ⅲ層中から出土したが、弥生時代に属する可能性が高い。

Ｄ　近世の陶磁器（図版５・11）

近世の遺物は古墳時代に次いで多い。肥前系陶磁器の器種・年代観については、『九州陶磁の編年』［九州近世陶磁学会2000］を参考に、観察表（第４・５表）に記した。時期的には18世紀代の遺物が中心で、17・19世紀の遺物が少量認められる。37が瀬戸産陶器、38～44が肥前系磁器、46・48・50～52が肥前系陶器（唐津）、49が須佐唐津産陶器、47が中国産磁器、45が産地不明の磁器である。

37は胴部が緑と赤で色絵付けされた灰釉の半球碗である。瀬戸産の陶器であり、18世紀代のものと思われる。38は見込みに綱目文様、胴部に二重綱目文様が描かれた染付の碗である。39は胴部に矢羽根文様が描かれた染付の碗である。40は染付の碗で草花文様が描かれている。41は胴部に草花文様、見込中央に花柄文様の施してある染付の碗である。高台には２本圏線が入っている。42は胴部に草花文様の施された染付の碗である。高台には２本圏線が入っている。43は雪輪草花文碗である。一般の碗に比べて底部が肉厚である。高台には２本圏線が入っている。44は見込が蛇ノ目釉剥ぎされた灰釉陶器碗である。高台にも斜

方向のケズリがみられる。45は丸皿で底部中央には「寿」という字が、裏には草花文様が施してある。高台には２本圏線が入っている。産地・時期ともに不明である。46は唐津の鉄釉端反皿で、口縁端部は輪花状を呈している。47は染付の中国産磁器皿で、中央に花柄文様が描かれている。時期は16世紀末から17世紀初頭（明末～清）と思われる。48は唐津の灯芯立てで、底面回転糸切りである。高台の上に丸い皿とその中に芯立てを持つ。高台以外に鉄釉がかけられ黄褐色を呈する。49は須佐唐津の摺鉢で、底部は削り出しの高台を呈する。50は唐津の摺鉢で底面が削り出され、低い高台状を呈する。底部に指頭圧痕が認められる。51は唐津の摺鉢で、口縁部が外側に折り返された形状を呈する。52は唐津の摺鉢片である。

Ｅ　古代・中世の土器・陶磁器（図版５・11）

53・54は古代の遺物で、須恵器である。53は無台杯で、底面は回転ヘラ切りである。54は甕の体部片で、外面のみに磨痕が認められ、研磨具として転用されている。

55～60は中世の遺物で、55・56は青磁の碗である。55は口縁端部で外反し、釉は光沢の少ない暗緑色を呈する。56は大きめの剣先蓮弁が施文される。ともに15世紀中頃と考えられる。57～59は珠洲焼の甕の体部片である。すべて外面平行打圧痕であるが、57・59は矢羽根状を呈している。57は肩部付近、58は底部付近に位置する。吉岡の編年区分［吉岡1994］のⅣ期（1280～1370年）に比定できる。24は中世土師器で、内外面に付着物が認められる灯明皿である。

Ｆ　石製品・木製品・金属製品・土製品（図版６・12）

石製品（68～72）

出土した石製品は全て砥石である。70・72のみほぼ完形を呈する。中央部分の磨り減った形態が多く、72のみ縦断面三角形を呈する。作業面は基本的に表裏左右の四面で、72のみ表裏の二面である。69は中央部欠損後に再使用しており、斜位の作業面をもつ。作業面には細かな線状痕が認められ、基本的に右肩下がりを呈する。68の左側面には断面Ｖ字状の沈線が、縦方向に数条認められる。68～71が凝灰岩製で中砥石、72が粘板岩製で仕上げ砥石に分類される。

木製品（73～76）

73は漆器碗の底部で、内外面赤色漆が塗装される。74は両面に墨書が認められる木簡で、時期は不明である。墨痕は薄く、全体を判別できないが、表面の一字目は「七」と考えられる。75は用途不明の組部材である。上部に二枚組接ぎの段差があり、下部は欠損するが三枚組接ぎ状の薄い切り込みが認められる。76は鍬身と形状が似るが、長さが12.5cmと小型であり、部材の一部である可能性が高い。

金属製品（77～81）

全て銭貨である。77が「淳化元寶」の草書体、78・79が「熙寧元寶」の真書と篆書体、80が「永楽通寶」、81が「寛永通寶」である。81は「古寛永」に分類され、1636～1659年に鋳造されている。

土製品（82）

鳩笛が１点ある。所属時期不明だが、近世以降に出現する。頭部を欠損するがほぼ完形で、羽部に赤彩が残る。鳩は八幡神の使いとも考えられており、神社や仏閣などで売られた玩具である。

第V章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　は　じ　め　に

道端遺跡は、胎内川左岸の沖積地に位置する。地形的には、胎内川の形成した扇状地性の沖積地に位置し、西側の日本海沿岸には海岸砂丘（新潟砂丘）が発達している（経済企画庁総合開発局、1973；斉藤・坂井、1988）。発掘調査により、古墳時代前期末と後期を中心とした遺物が出土したが、遺構は検出されていない。Ⅱ層（腐植土層）からは、根を張った状態の埋没株や倒木・流木状の木材が出土している。また、Ⅵ層（青灰色シルト）からは、種実遺体が検出されている。

本報告では、Ⅱ層から出土した木材の放射性炭素年代測定を行い、樹木の生育時期に関する資料を得る。また、Ⅱ層から検出された埋没株とⅥ層から検出された種実遺体の同定を行い、古植生に関する資料を得る。

2　試　　料

A　樹　　木

試料は、Ⅰ層（水田耕作土）の下位のⅡ層（腐植土層）から出土した埋没株と木材の２点である。当初は埋没株１点（17-O-18･19）の予定であったが、放射性炭素年代測定の処理過程で試料を乾燥した結果、予想以上に収縮して、純酸素中での燃焼によって発生する二酸化炭素の回収ができなかった。そのため、同層から出土した倒木状の丸太１点（17-P-1）について放射性炭素年代測定を行う。樹種同定は２点について行う。また、基本層序ではⅡ層の下位のⅢ層が古墳時代の遺物包含層である。

B　種　実　遺　体

試料は、Ⅵ層（青灰色シルト）から出土した種実遺体１ケース（18-N-23･24）で、ケース中に完形と破片を合わせて約60粒入っていた。本試料が検出されたⅥ層からは縄文時代後期後葉の遺物が出土している。

3　方　　法

A　放射性炭素年代測定

a）前処理

水でよく洗浄して表面の異物を取り除いた。乾燥、粉砕後、 次に水酸化ナトリウム溶液を加えて煮沸した。煮沸後の水酸化ナトリウム溶液は、色が薄い褐色になるまで傾斜法での除去を繰返した。次に塩酸

を加えて煮沸した後、塩酸は水で充分洗い流した。試料を乾燥させた後、蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料を純酸素中で燃焼させて二酸化炭素とし、アンモニア水に捕集した。これに塩化カルシウムを反応させ、純粋な炭酸カルシウムを回収した。

ｂ）測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン5mlにシンチレイターを0.075g加えたものを測定試料とした。

ｃ）測定

測定は、1回の測定時間50分間を繰り返し行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定した。

ｄ）計算

放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用した。

Ｂ　樹　種　同　定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定した。

Ｃ　種実遺体同定

試料を肉眼または双眼実体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴および当社所有現生標本との比較から種類を同定した。

４　結　　果

Ａ　放射性炭素年代測定・樹種同定

放射性炭素年代測定および樹種同定結果を第３表に示す。倒木状の丸太は、樹種が落葉広葉樹のトネリコ属で、年代は1,390BPであった。また、埋没株の樹種は、落葉広葉樹のハンノキ属ハンノキ亜属であった。同定された種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ハンノキ属ハンノキ亜属（*Alnus subgen. Alnus*）　　カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または２～４個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、１～30細胞高のものと集合放射組織とがある。

出土地点	層位	試料の質	樹種	年代値	誤差 +σ	誤差 -σ	Code No.	備考
17-O-18･19	Ⅱ層	生木（埋没株）	ハンノキ属ハンノキ亜属	----	--	--	----	二酸化炭素回収不能
17-P-1	Ⅱ層	生木（倒木状）	トネリコ属	1390	110	110	PAL-997	

１）年代は、1950年を基点とした年数。

２）放射性炭素の半減期は、5570年を使用した。

第３表　放射性炭素年代測定および樹種同定結果

・トネリコ属（*Fraxinus*）　　モクセイ科

環孔材で、孔圏部は２～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または２個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性、１～３細胞幅、１～40細胞高。

B　種実遺体同定

種実遺体は、全て落葉広葉樹のアカメガシワの種子であった。以下に形態的特徴などを示す。

・アカメガシワ（*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.）　　トウダイグサ科アカメガシワ属

種子（完形39個体、破片22個体）は黒色、偏球形。径4mm程度。種皮は硬く、表面には瘤状突起が密布し、ゴツゴツしている。基部にあるＹ字形の稜に沿って三裂しやすい。

5　考　　察

A　Ⅱ層の年代と古植生

Ⅱ層（腐食土層）は、標高の低い地点で認められ、多くの場所で耕作による攪乱を受けているが、一部で埋没株や倒木状の丸太などが検出されている。埋没株は、Ⅲ層とⅡ層の境界付近に根を張っており、Ⅱ層堆積時に生育していたことが推定される。なお、Ⅲ層からは古墳時代前期末と後期を主体とする遺物が出土している。

倒木状の丸太の年代測定値は1,390BPであり、ほぼ古墳時代後期～末頃（６世紀代）に相当する。この結果は、出土遺物から推定されるⅢ層の年代観とほぼ一致する。このことから、Ⅲ層堆積後それほど時間が経過していない段階で樹木が生育し、Ⅱ層が堆積したことが推定される。

一方、これらの木材の樹種は、埋没株がハンノキ亜属、倒木状の丸太がトネリコ属であった。これらの種類には、湿地等の水分の豊富な環境でも生育できる種類が多く含まれている。本遺跡は、東側の山地から日本海に西流する胎内川によって形成された扇状地性の沖積地に位置し、西側の日本海沿岸には海岸砂丘が発達している（経済企画庁総合開発局、1973；斉藤・坂井、1988）。そのため、雪解けや大雨などによる河川の氾濫があった場合には排水しにくく、湿地などが形成されやすいことが推定される。本遺跡周辺の山地と海岸砂丘に挟まれた低地は、潜在自然植生にツリフネソウ－ハンノキ群集やトネリコ－ハンノキ群落などの湿地林が推定されている（宮脇、1985）。今回の結果は、これらの潜在自然植生とも調和的であり、古墳時代後期頃の周辺低地にトネリコ属やハンノキ亜属を主とする湿地林が分布していたことが推定される。

B　Ⅵ層の古植生

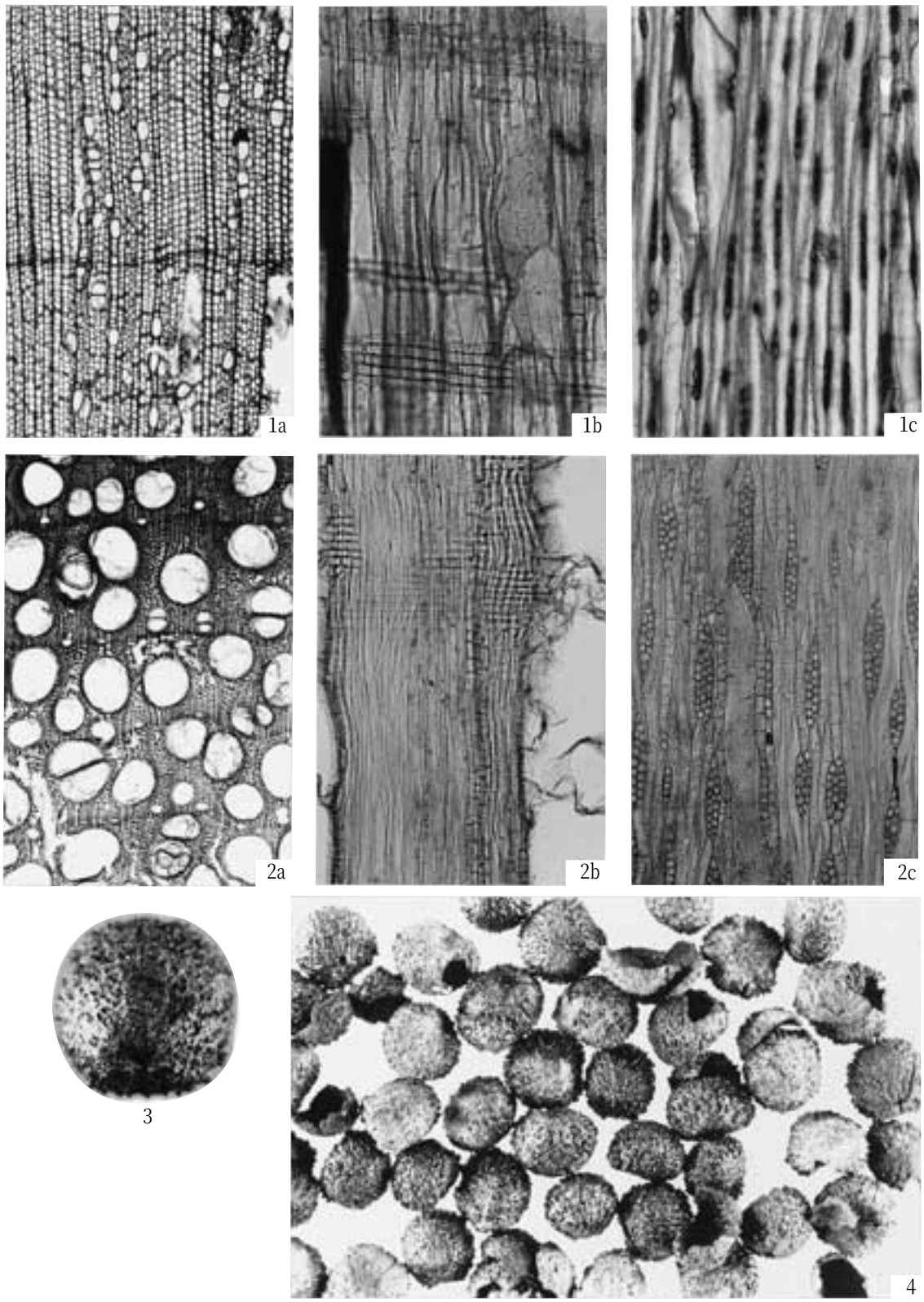
Ⅵ層中からは、縄文時代後期後葉の遺物が出土しており、種実遺体も同時期に生育していた母植物から散布されたことが推定される。アカメガシワは山地・平地の陽地に最も早く侵入する木本植物の一種であり、伐採地などによくみられる。アカメガシワは、１個体では多数の種子を付け、鳥獣によって散布される。今回の試料は、まとまって検出されていることから、鳥獣の排泄物等に由来する可能性がある。しかし、完形の種子も多数見られることから、アカメガシワのさく果が母植物から検出地点に落下・堆積した

可能性もある。鳥獣散布では、遠距離に運搬されることは稀であり、多くは採取個体に近い場所に排泄されることが多い（上田、1999a、1999b）。また、さく果の落下・堆積の場合も、運搬距離が長くなるほど種子は散在していくことが推定される。したがって、いずれの場合にも検出地点近くの微高地等にアカメガシワが生育していたことが推定される。

本地域では、古植生に関する資料が少ない。本遺跡では、埋没株が出土した腐植土層の他に、Ⅴ層にも腐植土層が見られる。これらの層では、木材化石の他にも花粉化石が残存している可能性が高い。また、Ⅵ層中には種実が残存していることから、花粉化石も残存している可能性がある。今後、これらの層の花粉分析や、土壌の水洗選別によって得られる種実、木材等の植物化石の同定を行い、本遺跡周辺の古植生変遷を明らかにしたい。

《引用文献》

経済企画庁総合開発局　1973　土地分類図15（新潟県）.
宮脇　昭編　1985　日本植生誌　中部．604p、至文堂.
斉藤道春・坂井陽一　1988　新潟平野とその周辺地域．日本の地質『中部地方Ⅰ』編集委員会編「日本の地質４　中部地方Ⅰ」、p132-135、共立出版株式会社.
上田恵介編　1999a　種子散布　助けあいの進化論〈１〉　鳥が運ぶ種子．112p、築地書館.
上田恵介編　1999b　種子散布　助けあいの進化論〈２〉　動物たちがつくる森．134p、築地書館.



1. ハンノキ属ハンノキ亜属（17-0-18・19）　a：木口、b：柾目、c：板目　200μm:1、2a
2. トネリコ属（17-P-1）　a：木口、b：柾目、c：板目　200μm:1、2b、c
3. アカメガシワ（18-N-23・24）　種子　2mm:3
4. アカメガシワ（18-N-23・24）　種子　5mm:4

第９図　木材・種実遺体

第VI章　ま　と　め

道端遺跡は調査の結果、古墳時代を主体とした集落遺跡であることが確認された。しかし遺物の出土量は地点によって濃淡がある。遺物の所属時期は後述するように、前期（４世紀代）と後期（５世紀末～６世紀前葉）の大きく２時期に分けられる。出土地点における時期別の出土量の比較から、集落の中心部分は時期ごとに異なることが推定されている。大きくは３地点に分かれ、前期の集落はSTA.371＋80を中心とする地点、後期の集落はSTA.370とSTA.374を中心とする２地点と考えられる。また一次調査では、インターチェンジの東縁に沿って埋没河川が検出されており、覆土中からは古墳時代前期の遺物が出土している。この埋没河川より西側に自然堤防が形成され、集落はその微高地上に沿った細長い形で存在している可能性が高い。

平成13年度二次調査で出土した遺物は、前期の遺物を主体として、後期の遺物も少量出土している。包含層出土遺物の出土標高は、前期集落の遺物出土標高と比べて低く、またSTA.374を中心とした後期集落の遺物出土標高と比較しても低い。このことは、埋没河川に沿った自然堤防が列状を呈しており、集落の中心となる部分はこの頂部に存在することを示す。調査区はこの両集落の谷間部分に位置しており、遺物の出土量や遺構の検出状況などから判断すると、両集落の縁辺部であったと考えられる。また第IV章で述べたように、個体の集中域と散布域に分けられる遺物の出土状況は、古墳時代前期の遺跡である豊栄市正尺Ａ遺跡でも認められる。報文中でこのような「散在する土器群」に対し、「調査では湿地や溝・旧河川流路等の痕跡が確認されなかったが、水に関する祭祀（水場や水路等の水口）に伴う供献土器の可能性も考えられる」［尾崎2001］としている。平成13年度調査区は、自然科学分析（第Ｖ章）の結果で、湿地林の分布が推定されている。今後の周辺の調査で、土器の個体集中域の性格が明らかになってくると思われる。

古墳時代の遺物の時期については、県内における既存の編年案との対比を行った。前期の遺物については品田編年［品田1992］、新潟シンポジウム編年［坂井・川村1993］、一之口遺跡編年［春日1994］などを参考に、後期の遺物については品田編年「品田1990」などを参考とした。それぞれの編年案には、加賀地方の当該期を通した編年案である漆町編年［田嶋1986］との併行関係が示されていることから、その漆町編年の名称を用いる。

現段階で最も古相を呈するのは擬凹線をもつ甕（16）で、漆町５群に位置付けられる。しかし遺跡の主体となる時期は、５・15・17・20などの形態から、漆町６・７群と考えられる。次いで多いのが、１～３の甕に見られるように、漆町９・10群に比定できる遺物である。よって道端遺跡では、古墳時代前期初頭～末までの遺物を認めることが出来る。後期の遺物は少量であるが、明瞭な稜をもつ須恵器杯蓋（11）が陶邑編年のTK23～47に比定できることから、おおむね漆町13・14群前後と考えられる。また小型壺（12）の存在などから、一部中期にまで遡る資料があると思われるが、大半は中期末～後期前葉に収まるものと考えられる。古墳時代包含層の上に堆積した腐植土層（Ⅱ層）中に含まれる木材は、西暦560年頃の年代測定結果が与えられており、遺物の年代観とも一致している。

荒川町内では、道端遺跡から東に約１km離れた場所に、古谷地Ｂ遺跡が位置している。この遺跡の主体となる土器の時期は、漆町編年の９群土器に比定［吉井1993］されている。このことから、微高地上に立地する集落（遺跡）が、近隣に散在していた景観が想定される。

要　　約

1　道端遺跡は、岩船郡荒川町南新保字道端97番地ほかに所在する。遺跡は胎内川により形成された扇状地の扇端部付近に位置し、現況は水田部に立地する。標高は約3.1mを測る。

2　発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、平成13年６月４日から10月31日にかけて実施した。発掘調査面積は、延べ面積8,000㎡（4,000㎡×２層）である。

3　調査の結果、古墳時代のピットが３基と土器の個体集中域が２か所検出された。遺物は古墳時代前期の土器を主体とし、ほかに古墳時代後期の土器、縄文時代後期の土器、弥生時代中期の土器、古代・中世・近世の土器・陶磁器、石製品、木製品、土製品、金属製品などが、整理箱で５箱程出土した。

4　古墳時代の遺物出土状況は、個体がまとまって廃棄された集中域と、数～十数片程度が一定のまとまりをもって出土する散布域に分けられる。調査区内では低地部分の、南西方面からの出土が多い。

5　縄文時代の遺物出土状況は、土器片が十数点の散布域を１か所検出した。遺構は検出できていない。

6　近世の陶磁器は、時期的に18世紀代が中心で、17・19世紀の遺物が少量認められる。

7　一次調査の結果、古墳時代の遺物は前期（４世紀代）と後期（５世紀末～６世紀前葉）に分けられ、集落の中心部分も時期ごとに異なる。荒川IC内には３地点の集落中心部分があると想定されている。

8　平成13年度調査区は、集落中心部分と比較して、低地部分に位置している。遺物の出土量や遺構の検出状況などから判断すると、集落の谷間の縁辺部であったと考えられる。

《引用文献》

阿部洋輔　1987　「第１章　第２節１　村と在家」『新潟県史』通史編２　中世　新潟県

甘粕　健ほか 1991　「村上市磐舟浦田山古墳群1989年度調査報告」『村上市史研究』第１号　村上市教育委員会

石橋輝樹ほか 1977　「Ⅶ地下資源　４水資源　４・２地下水」『新潟県地質図説明書』新潟県

尾崎高宏　2001　「第Ⅴ章１Ａ　土器の分布状況」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第107集　正尺Ａ遺跡』
新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　1994　「第Ⅵ章３．古墳時代前期の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集　一之口遺跡東地区』
新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年　―九州近世陶磁学会10周年記念―』

寄藤　昂・大矢雅彦　1988　「荒川と胎内川における扇状地発達の相違について」『東北地理』Vol.40　東北地理学会

小林巌雄ほか 2000　「Ⅳ新生界　４完新統　４・２海岸砂丘」『新潟県地質図説明書』新潟県商工労働部商工振興課

坂井秀弥・川村浩司　1993　「古墳出現前後における越後の土器様相」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』
「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ

品田高志　1990　「越後における古墳時代土器の変遷」『柏崎市立博物館　館報』№４　柏崎市立博物館

品田高志　1992　「越後における古墳時代土器の変遷Ⅱ」『柏崎市立博物館　館報』№６　柏崎市立博物館

田嶋明人　1986　「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター

田辺早苗　1991　『長松遺跡発掘調査報告書』神林村教育委員会

田辺早苗ほか 2001　『衣田遺跡・道上遺跡発掘調査報告書』神林村教育委員会

田村　裕　1987　「序章　第２節　古代の中の中世」『新潟県史』通史編２　中世　新潟県

永田　聰ほか 1972　「各論　Ⅰ地形分類図」『新潟県下越開発地域土地分類基本調査　中条』新潟県農地部農地計画課

新潟古砂丘グループ　1974　「新潟砂丘と人類遺跡－新潟砂丘の形成史Ⅰ－」『第四紀研究』第13巻第２号

吉井雅勇　1993　『坂町宮ノ腰Ｂ遺跡発掘調査報告書』荒川町教育委員会

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館

《別表》土器類（Ⅰ）

報№	出土地点	種　別	器　種	法　　量（cm）				備　　考
1	17M１　Ⅲ層	古墳土師	甕	口　19.0	高（22.8）			「く」字状口縁。胴部最大径24.2cm
2	17M３　Ⅲ層	古墳土師	甕	口　18.8	高（28.9）	底（ 2.4）		「く」字状口縁。胴部最大径23.4cm
3	17M３　Ⅲ層	古墳土師	甕	口　20.2	高　21.4			「く」字状口縁。胴部最大径25.6cm
4	19S17イ　Ⅲ層	古墳土師	壺	口（20.6）				有段口縁
5	20O２ア　Ⅲ層	古墳土師	壺	口　17.8				東海系。受口口縁。胎土に砂礫多く含む
6	16O25　Ⅲ層	古墳土師	鉢	口　18.8				
7	18Q６エ　Ⅲ層	古墳土師	鉢	口　10.3	高　6.6			
8	18N２　Ⅰ層	古墳土師	器　台					外面・受部内面に赤彩
9	16Q20ウ　Ⅲ層	古墳土師	内黒杯	口　14.4	高（ 4.9）			胎土に海綿骨針多く含む
10	18P８　撹乱	古墳土師	高　坏	底（12.0）				
11	８Tr	古墳須恵	杯　蓋	口（12.6）				陶邑編年のTK23かTK47
12	８Tr　SD内	古墳土師	壺	胴　12.2	高　9.1			粘土紐幅約1.5cm
13	14Tr	古墳土師	甕	口（18.8）	高（10.1）			「く」字状口縁。胴部最大径18.8cm
14	14Tr	古墳土師	甕	底　4.0				底面高台状を呈す
15	70Tr	古墳土師	壺	口　15.0				有段口縁。内外面赤彩
16	73Tr	古墳土師	甕	口　18.7				口縁に擬凹線
17	73Tr	古墳土師	甕	口　18.2				「く」字状口縁。焼成堅緻
18	73Tr	古墳土師	甕	口　23.0				受口状口縁
19	73Tr	古墳土師	壺	口　17.0				有段口縁。器台の可能性有り
20	76Tr	古墳土師	甕	口　16.0				指頭圧痕あり
21	76Tr	古墳土師	器　台	口（ 8.4）	高（ 8.0）			脚部に三方に円孔透かし
22	76Tr	古墳土師	高　坏					脚部に三方に円孔透かし
23	77Tr	古墳土師	甕	口　15.0				
24	77Tr	古墳土師	鉢	口（11.2）	高（ 5.2）	底　2.8		底部内面に回転状のナデ
25	84Tr	古墳土師	器　台	底　7.6				外面赤彩
26	114Tr	古墳土師	甕	口（15.6）				広口壺の可能性有り
27	114Tr	古墳土師	小型土器	高（ 2.2）	底　3.2			ミニチュア土器
28	128Tr	古墳土師	蓋	径　2.6	高（ 2.3）			
29	129Tr	古墳土師	甕	高（ 3.3）	底　8.4			底面高台状を呈す。壺の可能性有り
30	17O２　Ⅰ層	縄文土器	深　鉢					波状口縁。LR縄文。沈線
31	19Q１ウ　Ⅵb層	縄文土器	深　鉢					LR縄文。平行沈線
32	19Q１エ　Ⅵb層	縄文土器	深　鉢					LR縄文。平行沈線
33	38Tr	縄文土器	深　鉢	口（26.0）				突起付平口縁。羽状文（未結束LR縄文）
34	38Tr	縄文土器	深　鉢	口（17.0）				小型深鉢。上部沈線。下部RL縄文
35	15Tr	弥生土器	甕	口　16.0				３段の綾杉沈線文。小松式
36	19T９ウ　Ⅲ層	弥生土器	甕					２本の平行弧線文（下向き連弧文）。栗林式
37	18P13 Ⅰ層	近世陶磁	碗	口　9.0	高　5.8	底　3.2		色絵。18世紀代
38	20N７　表採	近世陶磁	碗	口　9.6				表：二重網目文。裏：網目文。1750～1770年
39	21M15　表採	近世陶磁	碗	口（10.0）				矢羽根文。18～19世紀末
40	16P　撹乱	近世陶磁	碗	口　9.4				草花文。時期不明
41	20P23　Ⅲ層	近世陶磁	碗	底　4.1				表：草花文。裏：花柄文。18世紀前半
42	17R14　Ⅰ層	近世陶磁	碗	底　4.1				草花文。18世紀後半
43	９Tr	近世陶磁	碗	底　3.7				雪輪草花文。18世紀中～後半
44	97Tr	近世陶磁	碗	底　4.0				蛇ノ目釉剥ぎ。19世紀後半
45	18M23　Ⅰ層	近世陶磁	皿	底　5.4				底中央：草花文。見込：「寿」文
46	129Tr	近世陶磁	皿	口　15.5				口縁輪花状。時期不明
47	97Tr	中国磁器	皿	底　7.0				見込：花柄文。16世紀末～17世紀初
48	18P６　Ⅰ層	近世陶磁	灯芯立て	口　4.8	高（ 4.2）	底　4.0		
49	17Q21　Ⅰ層	近世陶磁	擂　鉢	底　11.4				卸目１単位（幅2.8cm）11本。17世紀後半

土器類（Ⅱ）

報№	出土地点	種　別	器　種	法　　量（cm）				備　　考
50	18Ｐ25　Ⅰ層	近世陶磁	擂　鉢	底　9.0				卸目１単位（幅1.5cm）７本。17世紀前半
51	16Ｐ15　Ⅰ層	近世陶磁	擂　鉢	口（39.2）				卸目１本間隔５mm。Ⅳ期（1690～1750年）
52	18Ｐ25　Ⅰ層	近世陶磁	擂　鉢					卸目は１単位（幅3.8cm）15本
53	18Ｏ17　Ⅰ層	須　恵	無台杯	底　9.0				底面回転ヘラ切り無調整
54	19Ｏ９　Ⅲ層	須　恵	甕					外面：平行打圧痕。内面：平行押圧痕 転用研磨具（外面のみ磨痕）
55	48Tr	青　磁	碗	口（14.2）				15世紀中頃
56	16Ｒ25　Ⅰ層	青　磁	碗	口（16.0）				大き目の剣先蓮弁文。15世紀中頃
57	101Tr	珠　洲	甕					外面：平行打圧痕（矢羽根状）
58	17Ｒ９　撹乱	珠　洲	甕					外面：平行打圧痕
59	18Ｑ11　Ⅰ層	珠　洲	甕					外面：平行打圧痕（矢羽根状）
60	17Ｏ３　Ⅰ層	中世土師	灯明皿	口　10.0				黒色付着物

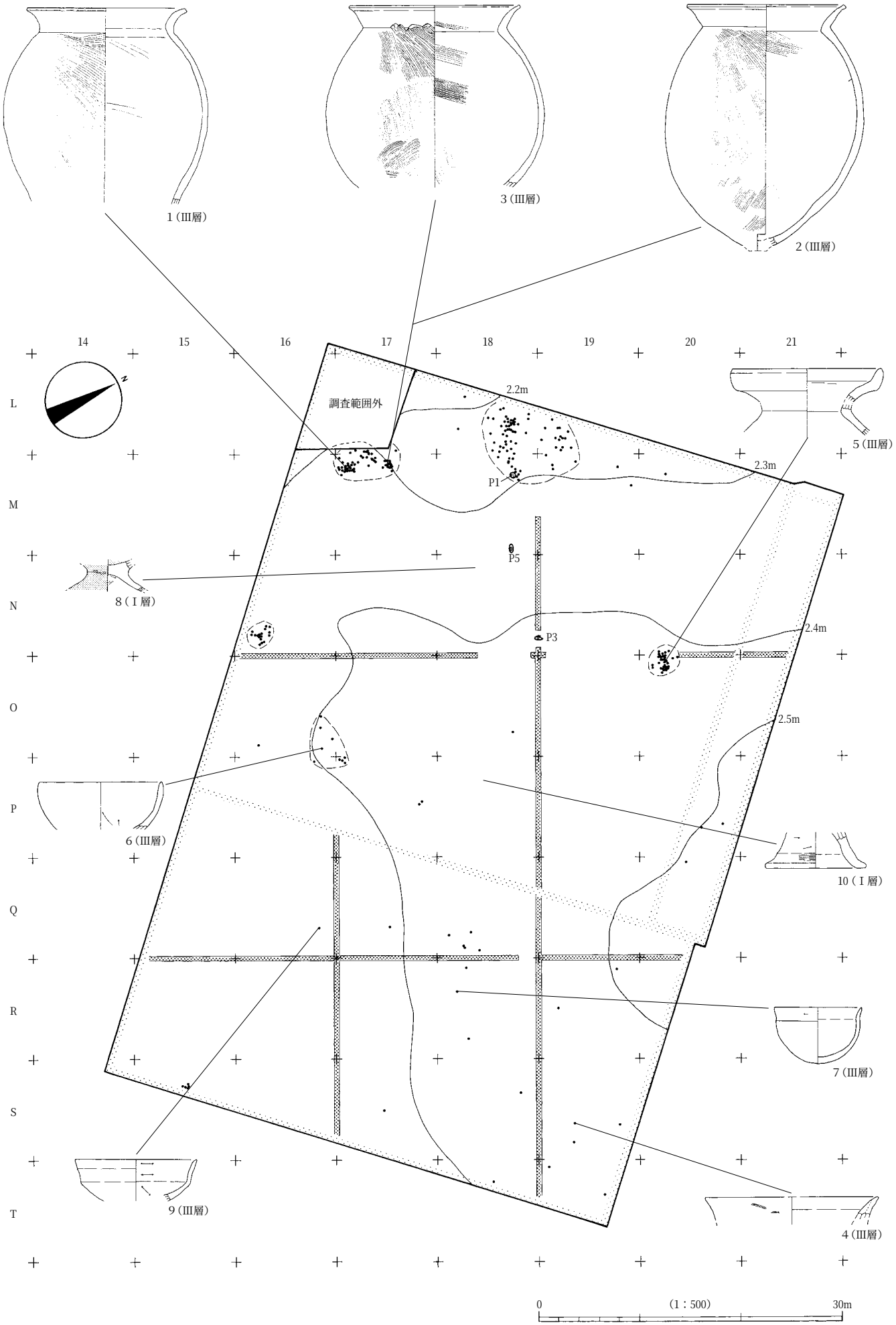
石器・その他製品

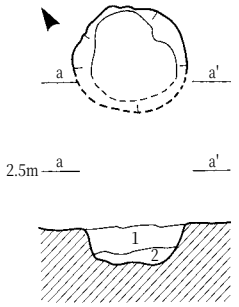
報№	出土地点	種　別	器　種	法量（cm・ｇ）				備　　考
61	19Tr	石　器	石　鏃	縦　4.9	横　1.3	厚　0.6	重　2.6	有茎石鏃。珪質頁岩製
62	19S22ア　Ⅲ層	石　器	石　鏃	縦　2.9	横　2.0	厚　0.4	重　1.8	有茎石鏃。半透明の頁岩製
63	110Tr	石　器	剥　片	縦　2.7	横　3.8	厚　1.0	重　13.0	右側縁に微細剥離痕。珪質頁岩製
64	40Tr	石　器	石　匙	縦　4.4	横　7.5	厚　0.8	重　31.1	横型石匙。半透明の頁岩製
65	104Tr	石　器	礫　器	長　12.0	幅　8.7	厚　4.3	重　442	流紋岩製
66	17Ｐ16　撹乱	石　器	磨　石	長　6.8	幅　5.9	厚　3.0	重　130	流紋岩製
67	16Ｏ22ア　Ⅲ層	石　器	磨　石	長　4.3	幅　4.1	厚　2.9	重　7.2	軽石製研磨具。面状磨耗痕
68	20Ｍ６　Ⅰ層	石製品	砥　石	長　8.9	幅　5.2	厚　3.1	重　222	凝灰岩製中砥石。作業面４面
69	19Ｎ25　Ⅰ層	石製品	砥　石	長　7.1	幅　4.5	厚　4.1	重　161	凝灰岩製中砥石。作業面４面
70	37Tr	石製品	砥　石	長　13.3	幅　5.3	厚　2.8	重　337	凝灰岩製中砥石。作業面４面
71	表採	石製品	砥　石	長　8.2	幅　5.9	厚　2.9	重　158	凝灰岩製中砥石。作業面４面
72	16Ｐ25　Ⅰ層	石製品	砥　石	長　4.1	幅　2.6	厚　0.8	重　11	粘板岩製仕上げ砥石。作業面表裏２面
73	114Tr	木　器	漆器椀	底（ 5.4）				内外面赤色漆
74	17Ｏ16　Ⅰ層	木製品	木　簡	長　16.9	幅　3.9	厚　0.4		両面に墨書。表面１字目「七」
75	18Ｏ11　Ⅰ層	木製品	部　材	長　18.1	幅　1.0	厚　1.3		上部二枚組接ぎ。下部三枚組接ぎ
76	17Ｐ24　Ⅰ層	木製品	部　材	長　12.6	幅　3.9	厚　1.2		
77	21Ｏ16　Ⅰ層	金属製品	銭　貨	径　2.45	重　3.47			淳化元寶（北宋：初鋳990年）。草書体
78	42Ｐ　表採	金属製品	銭　貨	径　2.31	重　2.20			熙寧元寶（北宋：初鋳1068年）。真書体
79	24Tr	金属製品	銭　貨	径　2.38	重　2.46			熙寧元寶（北宋：初鋳1068年）。篆書体
80	35Tr　付近表採	金属製品	銭　貨	径　2.42	重　2.13			永楽通寶（明：初鋳1408年）
81	17Ｐ６　Ⅰ層	金属製品	銭　貨	径　2.48	重　3.11			寛永通寶（日本：1636～1659年）。古寛永
82	表採	土製品	鳩　笛	長　6.3	幅　2.7	高（ 3.0）		羽部分に赤彩

図　　版

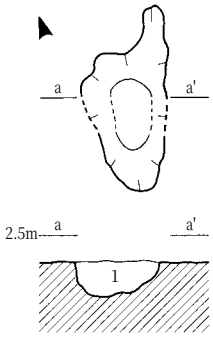
図 版 1

調査区上層全体図

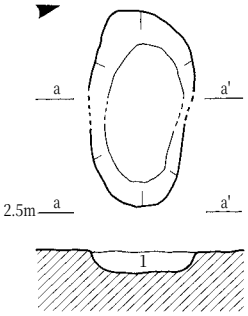




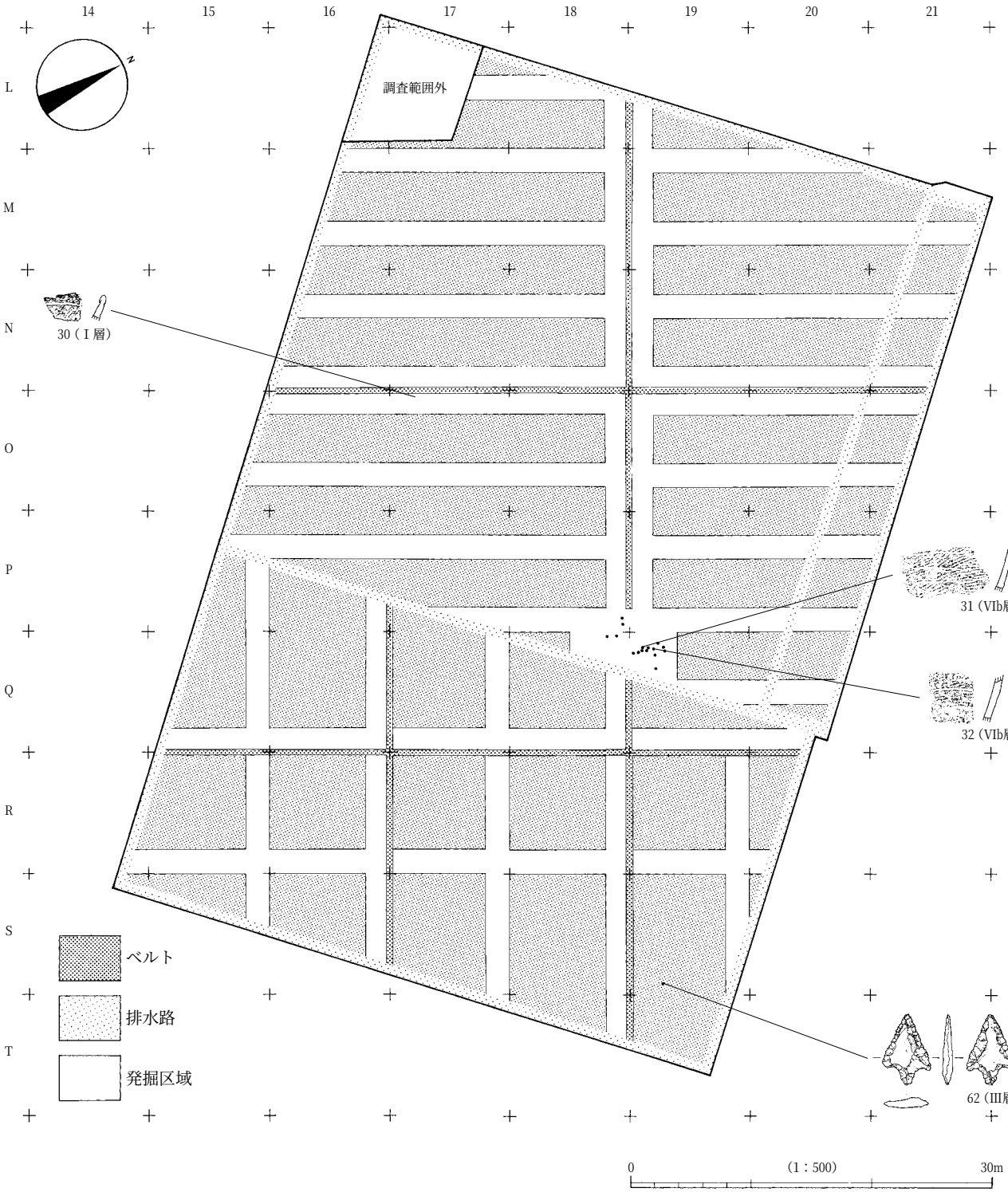
P1
1. 灰黄褐色土
2. 暗褐色土



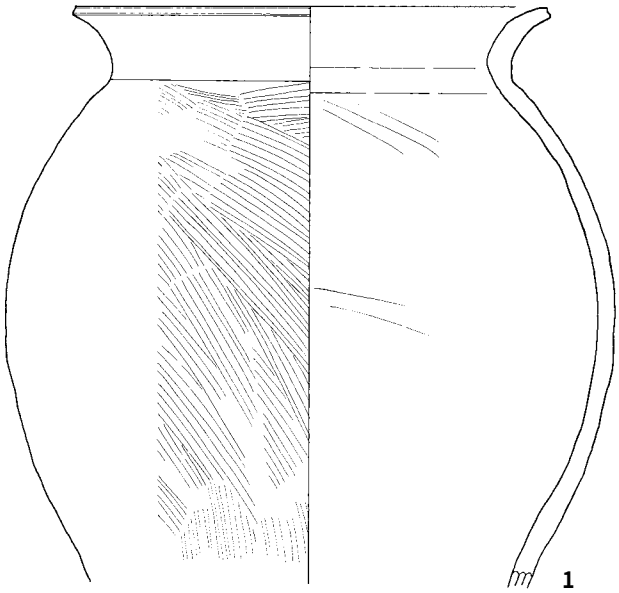
P3
1. 暗褐色粘質土



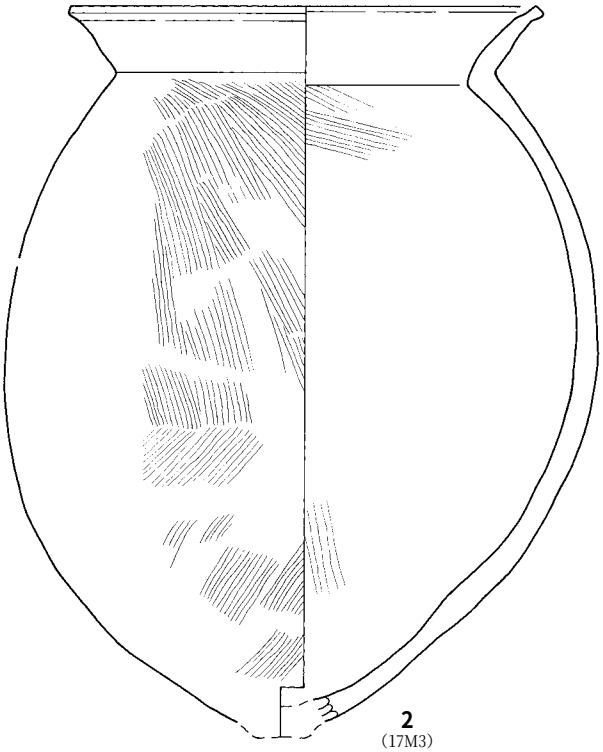
P5
1. 黄灰色粘質土



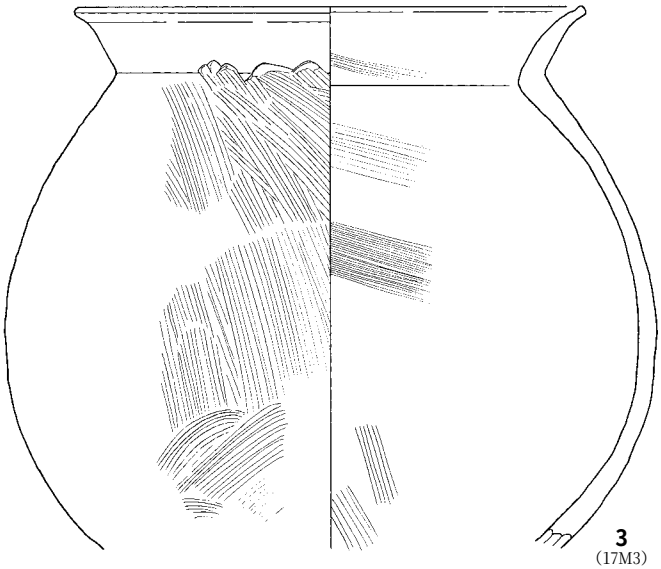
〔古墳時代〕



1
(17M1)

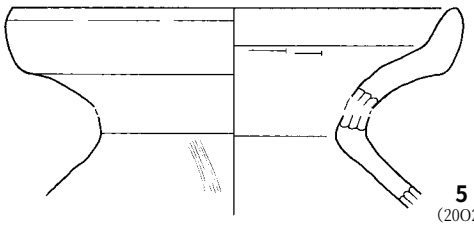


2
(17M3)

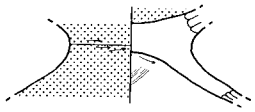


3
(17M3)

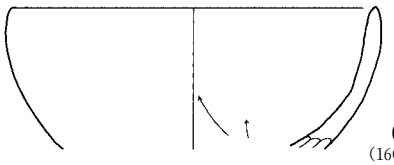
4
(19S17)



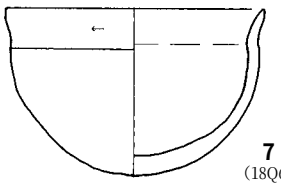
5
(20O2)



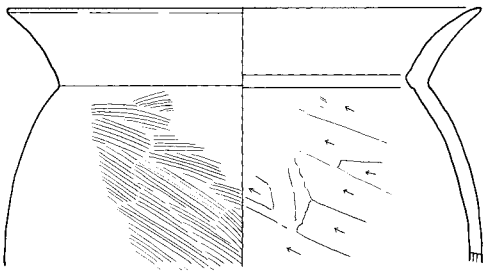
8
(18N2)



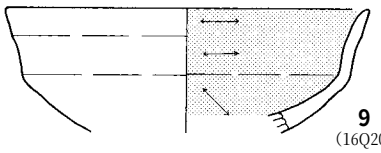
6
(16O25)



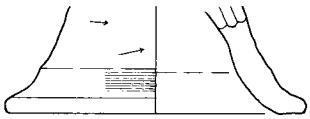
7
(18Q6)



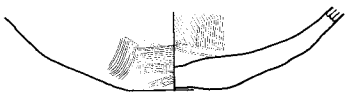
13
(14Tr)



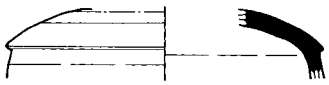
9
(16Q20)



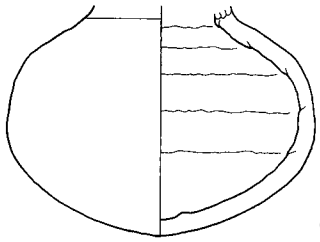
10
(18P8)



14
(14Tr)



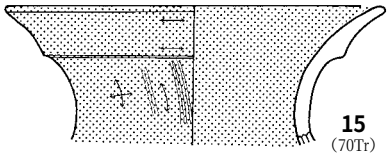
11
(8Tr)



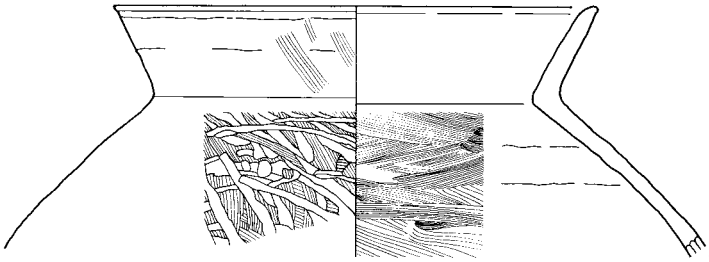
12
(8Tr)

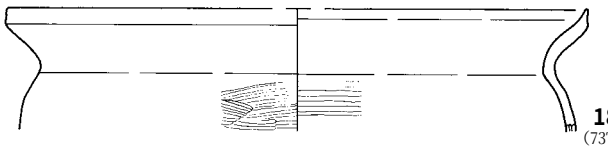
0　1～14（1：3）　15cm

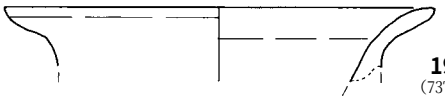
〔古墳時代〕

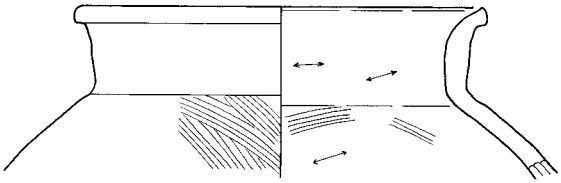

15
(70Tr)

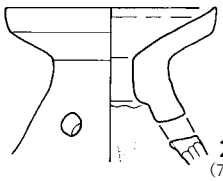
16
(73Tr)

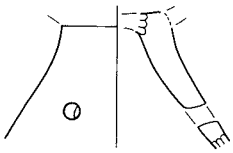

17
(73Tr)

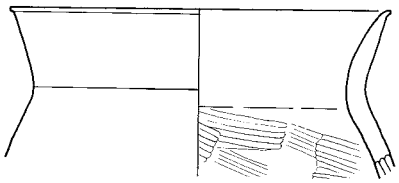

18
(73Tr)

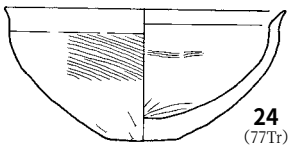

19
(73Tr)

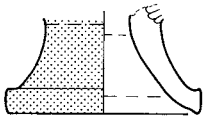

20
(76Tr)

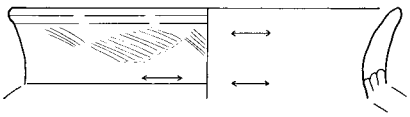

21
(76Tr)


22
(76Tr)

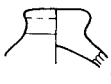

23
(77Tr)

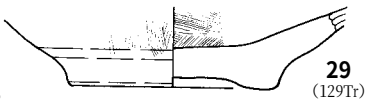

24
(77Tr)


25
(84Tr)


26
(114Tr)

27
(114Tr)

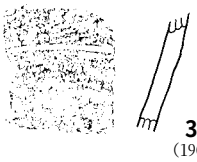

28
(128Tr)

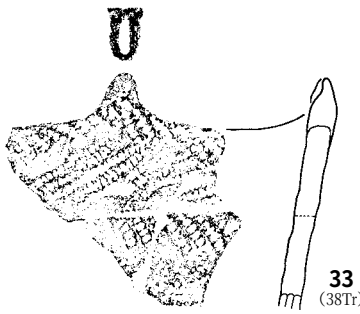

29
(129Tr)

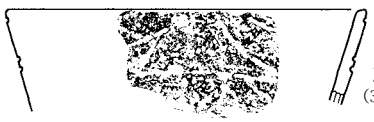
〔縄文時代・弥生時代〕

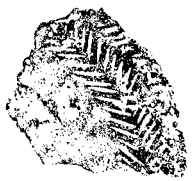
30
(17O2)

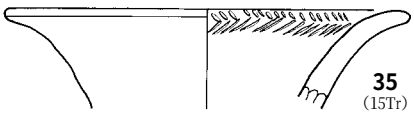
31
(19Q1)


32
(19Q1)


33
(38Tr)


34
(38Tr)



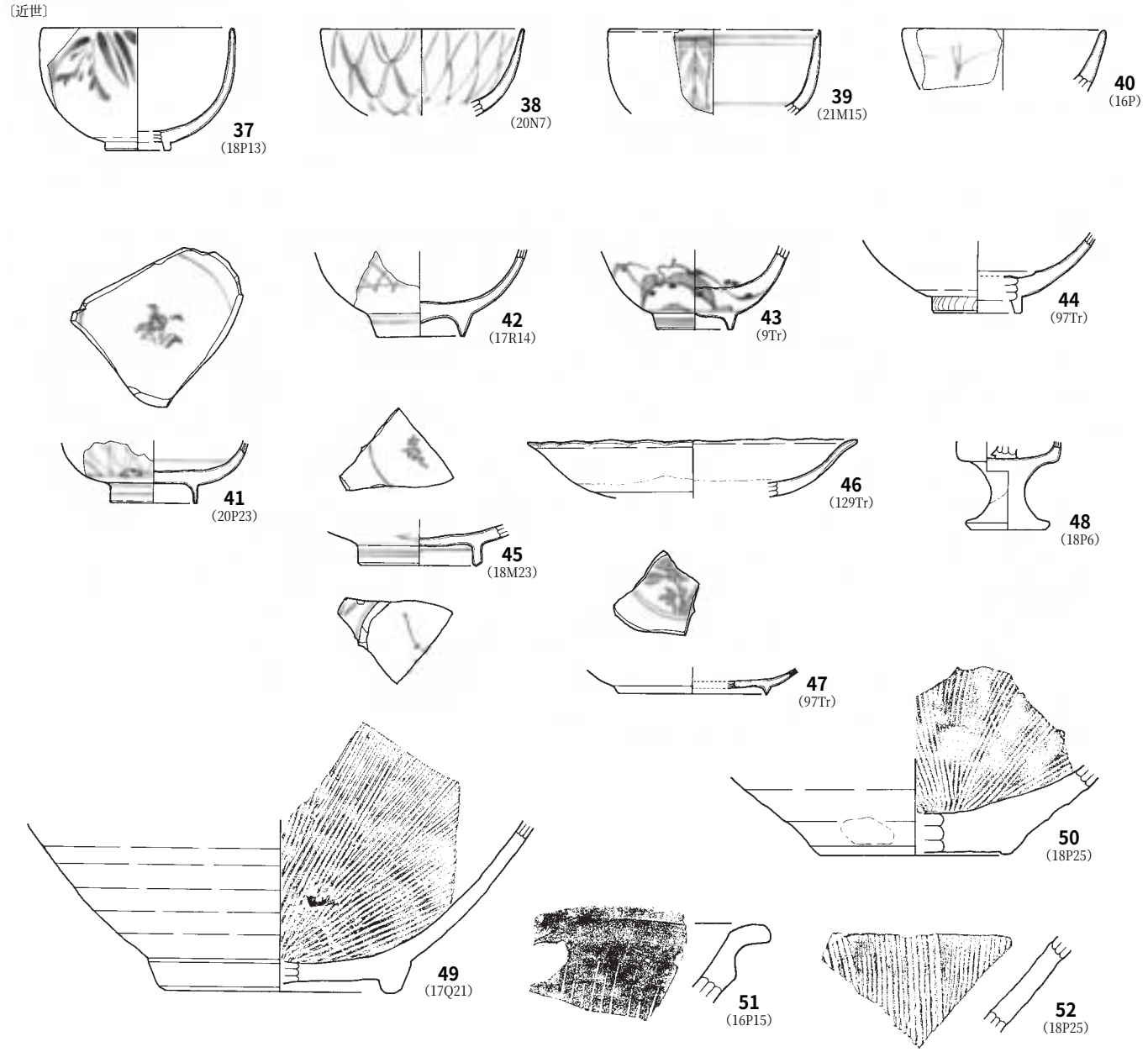

35
(15Tr)

36
(19T9)

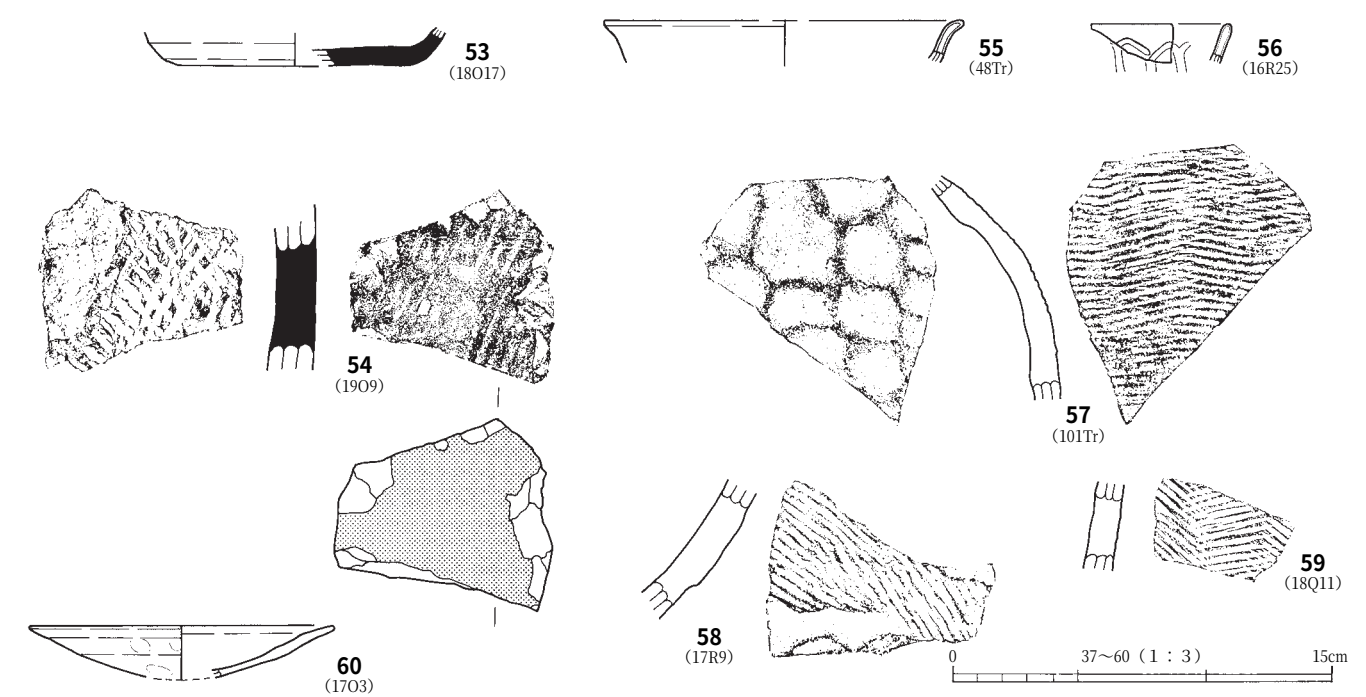
0　15～36（1：3）　15cm

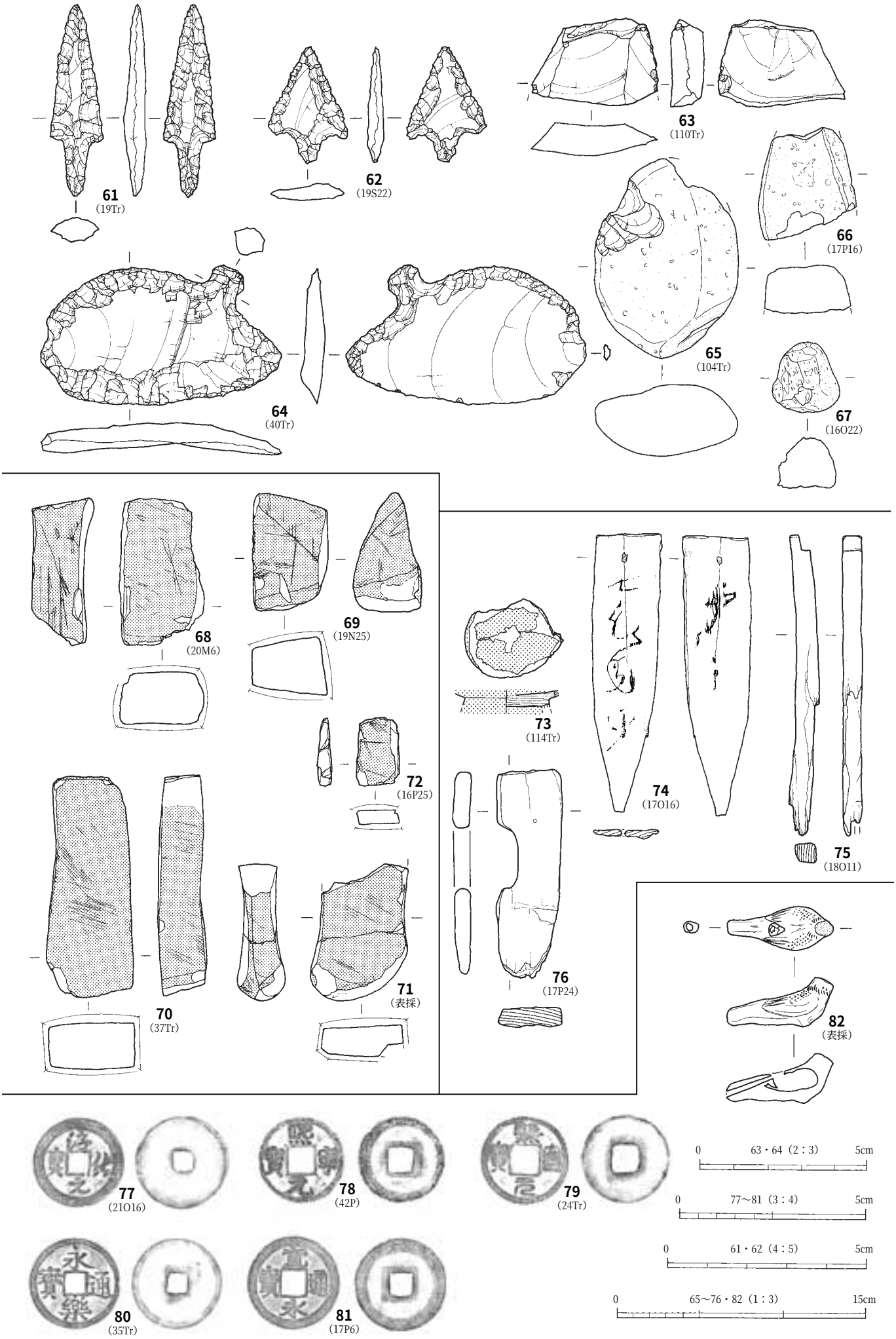
図 版 5

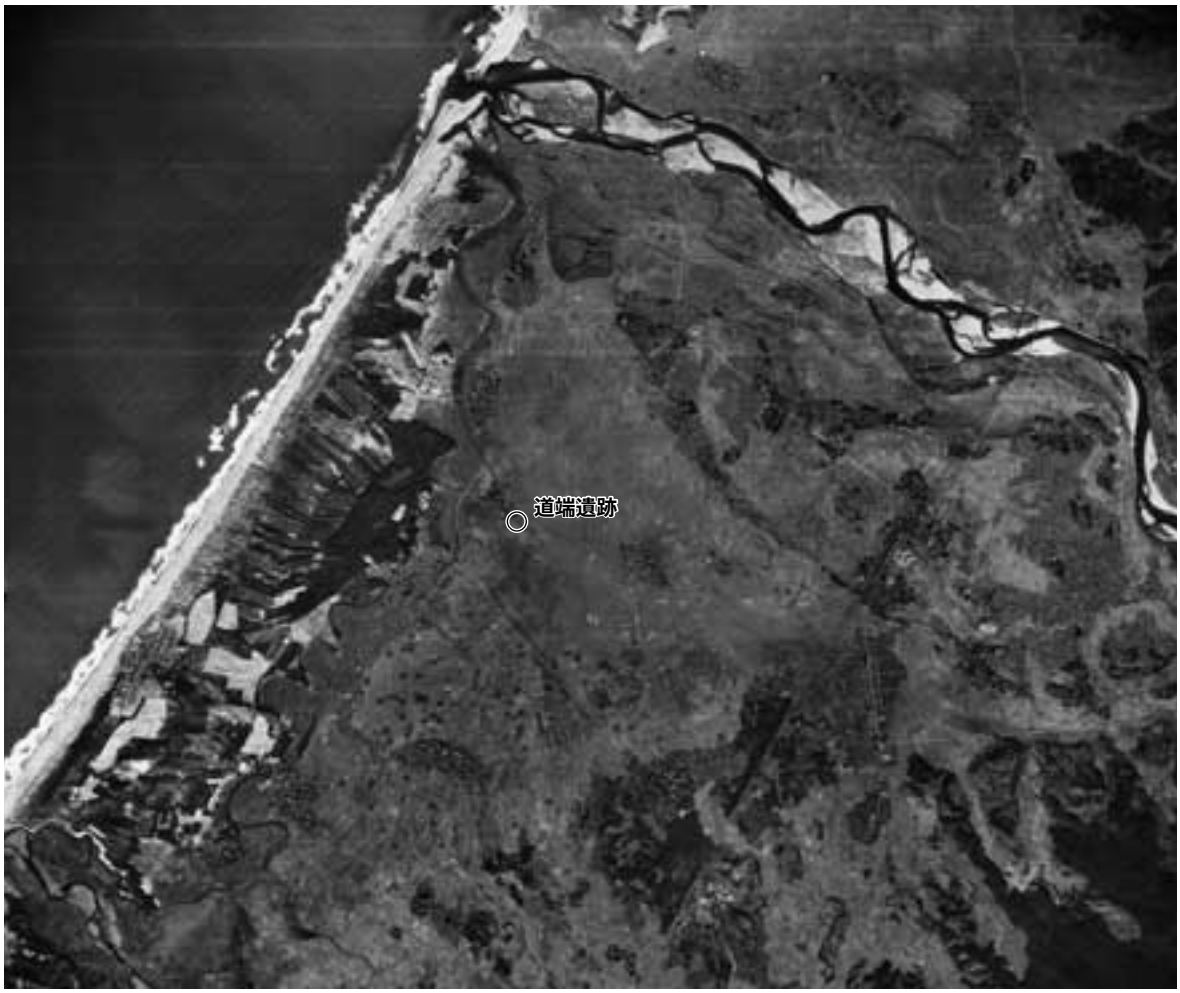
〔近世〕


37
(18P13)
38
(20N7)
39
(21M15)
40
(16P)
42
(17R14)
43
(9Tr)
44
(97Tr)
41
(20P23)
46
(129Tr)
48
(18P6)
45
(18M23)
47
(97Tr)
50
(18P25)
49
(17Q21)
51
(16P15)
52
(18P25)

〔古代・中世〕


53
(18O17)
55
(48Tr)
56
(16R25)
54
(19O9)
57
(101Tr)
59
(18Q11)
58
(17R9)
60
(17O3)
0
37～60（1：3）
15cm


61
(19Tr)
62
(19S22)
63
(110Tr)
64
(40Tr)
65
(104Tr)
66
(17P16)
67
(16O22)
68
(20M6)
69
(19N25)
70
(37Tr)
71
(表採)
72
(16P25)
73
(114Tr)
74
(17O16)
75
(18O11)
76
(17P24)
82
(表採)
77
(21O16)
78
(42P)
79
(24Tr)
80
(35Tr)
81
(17P6)
0　63・64（2：3）　5cm
0　77～81（3：4）　5cm
0　61・62（4：5）　5cm
0　65～76・82（1：3）　15cm



遺跡周辺の航空写真　〔約1/44,000　日本地図センター発行　1947年11月13日米軍撮影〕

道端遺跡近景　村上方面を望む　南西から

図 版 8

道端遺跡近景　高坪山を望む　北西から

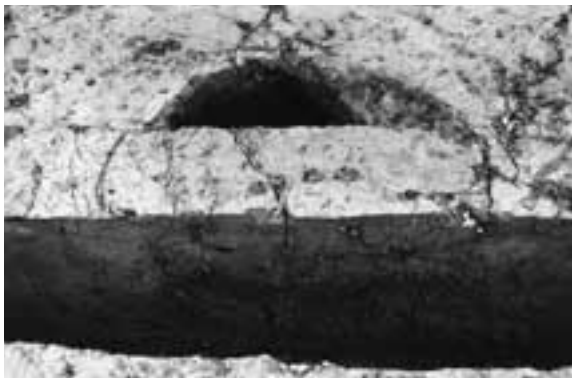
道端遺跡航空写真　左がＡ区　右がＢ区

Ａ区上層完掘状況　南から

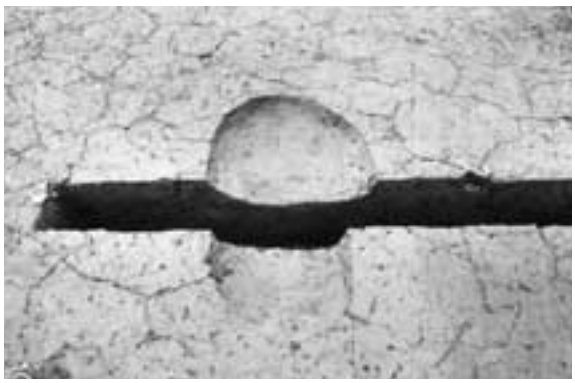
Ｂ区上層完掘状況　西から

Ａ区下層完掘状況　南から

Ⅱ層埋没株検出状況　西から


P1断面　南から

P3断面　南から


P5完掘状況　南から

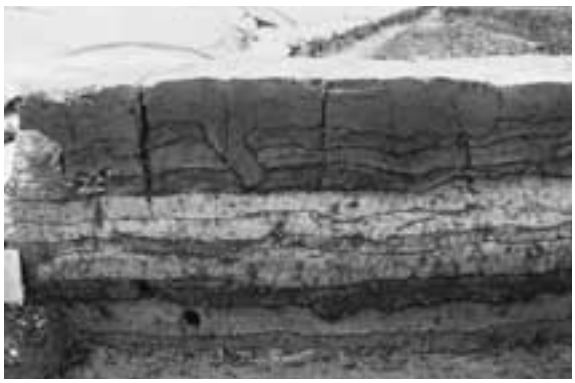
上層（18L24区）出土状況　西から

上層（17M1区）出土状況　北から

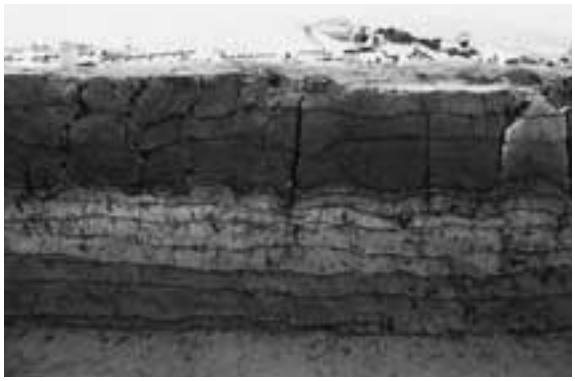
上層（17M3区）出土状況　東から

下層（19Q1・6区）出土状況　北から

19ライン土層断面　南東から



18L20区土層断面　南から



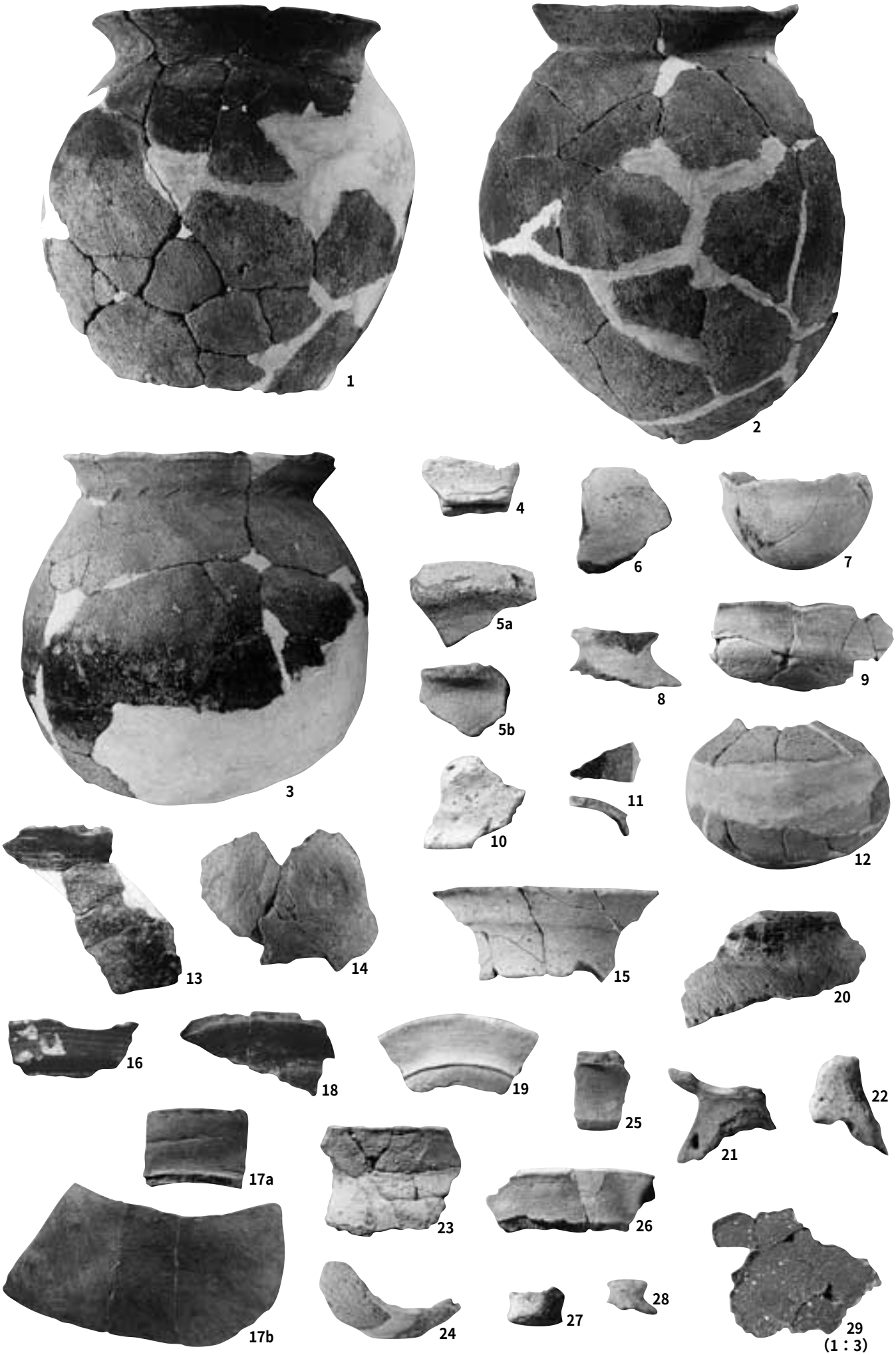
17N25区土層断面　西から

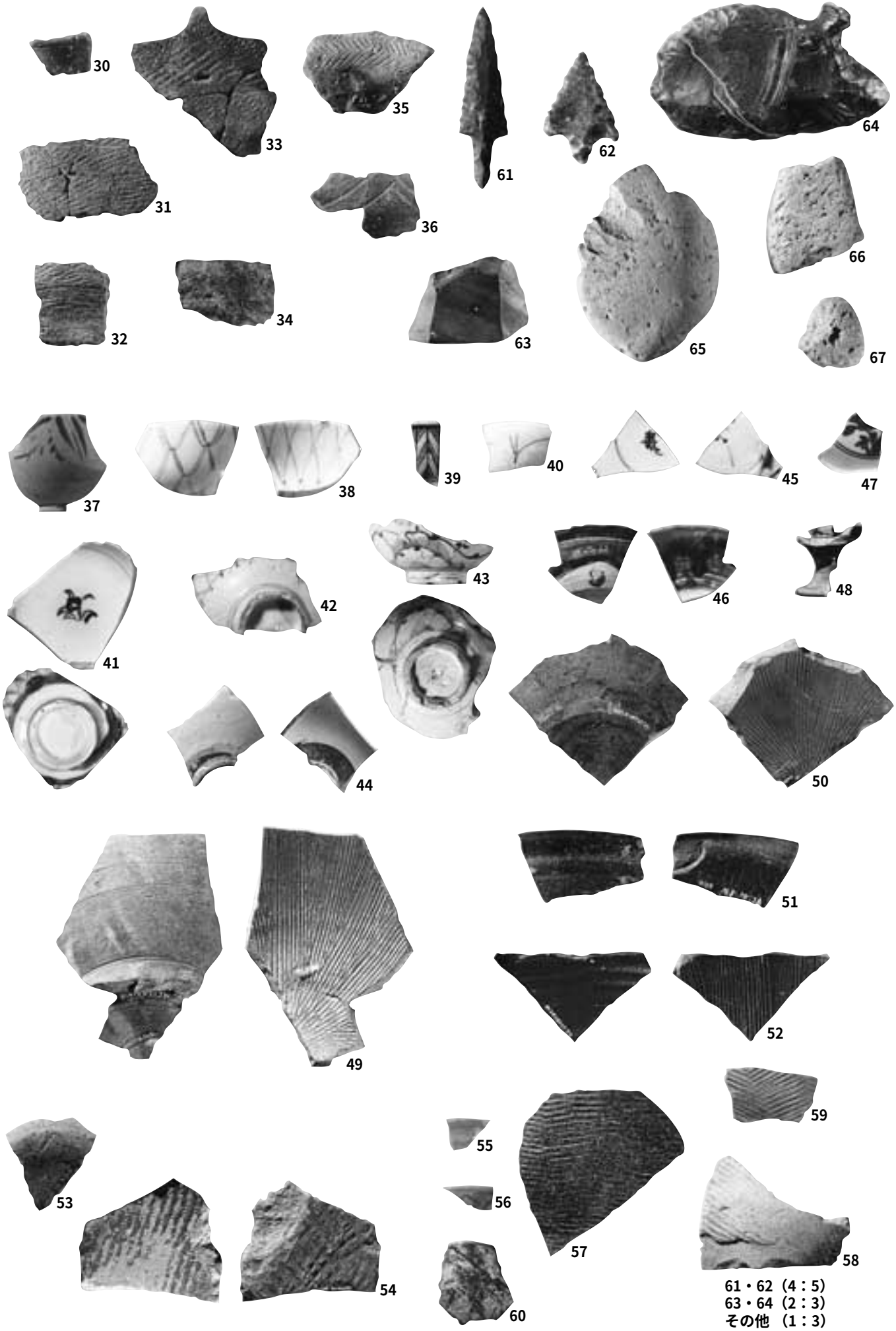
16Q25区土層断面　南から

確認114Tr　埋没河川断面　東から

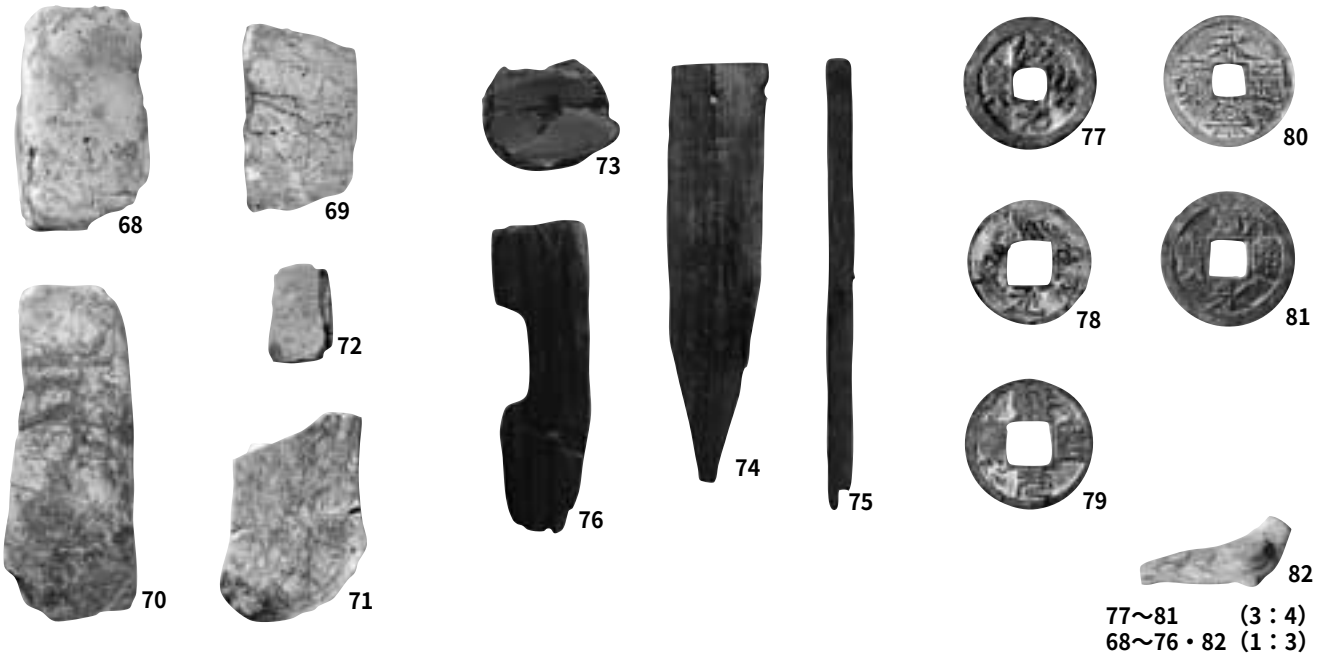
確認８Tr　溝状遺構検出状況　東から

確認10Tr　柱根出土状況　西から


1
2
3
4
5a
5b
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17a
17b
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
(1：3)



61・62（4：5）
63・64（2：3）
その他（1：3）



77～81　　（3：4）
68～76・82（1：3）

報告書抄録

ふりがな	みちばたいせきいち
書名	道端遺跡Ⅰ
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書
巻次	Ⅲ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第112集
編著者名	石川智紀・内藤真一・鈴木秀人
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956-0845　新潟県新津市大字金津93番地１　　TEL　0250(25)3981
発行年月日	西暦2002（平成14）年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
道端遺跡（みちばたいせき）	新潟県岩船郡荒川町大字南新保字道端97番地ほか（にいがたけんいわふねぐんあらかわまち おおあざみなみしんぼあざみちばた）	15-582	75	38度07分01秒	139度24分56秒	20010604～20011031	8,000m²（4,000×２層）	日本海沿岸東北自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道端遺跡	集落	古墳時代前期(4C)後期(5C末～6C前)	ピット３基	土師器・須恵器	集落縁辺部に存在する個体集中域
	散布地	縄文時代(後期)弥生時代(中期)平安時代室町時代江戸時代		縄文土器・弥生土器・須恵器・青磁・珠洲焼・中世土師器・肥前系陶磁器・瀬戸系陶磁器・中国産磁器・石器・石製品・漆器・木製品・土製品・金属製品	

新潟県埋蔵文化財調査報告書第112集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書　Ⅲ

道端遺跡　Ⅰ

平成14年３月28日　印刷
平成14年３月29日　発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町４番地１
電話　025（285）5511
財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新津市大字金津93番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　新高速印刷株式会社
〒950-0963　新潟市南出来島2－1－15
電話　025（285）3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第112集 『道端遺跡Ⅰ』 正誤表　　2018年11月追加

頁	位置	誤	正
抄録	北緯（旧座標）	３８度０７分０１秒	３８度０７分００秒
抄録	東経（旧座標）	１３９度２４分５６秒	１３９度２４分５９秒